女鑑

明治廿六年五月廿四日發行

第三十九號

東京國光社

女鑑第三十九號目次

加茂眞淵の妻



女鑑 第三十九號

女鑑

婦人の庸德

國乱れて忠臣現れ、家貧しうして良妻を知る。松柏の亭々たるも、夏木立の中に在りては、よく其の節操を知らるゝことなきなり。故に必ず烈女たれ、必ず節婦たれとすゝむるは、必ず逆境に臨めよ、必ず艱苦に陷れよとすゝむるに同じきが如き嫌なきにあらず。世は欠陷おほきものにして、不幸艱苦の一日も忘るべからざるは、論ずるまでもなきことにして、古より道を立てたるものは、皆艱苦に處する所以を以て、本となさゞるはなきなり。然れば吾人も、亦常に斯道を講ずるに於いて、餘力を遺さずと雖も、一張一弛は、敎の要義なれば、聊か茲に、婦

人の庸道を説かん。

夫れ此の世の中は、進む先は、實に遼遠なるものにして、今日を以て、昔日に比するときは、著く進歩したりと雖も、この先々は、尚々進歩すべきものにして、猶長大なる、無限の繪卷物を繙いて、未だ其の半にも至らざるが如し。この瑋麗、瑰琦なる卷物は、　皇祖　皇宗の、後昆に遺し賜へるものにして、千萬世の進歩は、既に靈幸ふ神の御代より、確然定まり居れるものなるも、この卷軸を開きもてゆくは、後人の責任なり。故に皇國の御民たるもの、、國に盡くすべき道は、又無限なるものにして、而して其の報酬は、之を眼前に求むべきものにあらず。要するに、其の爲すべきだけのことを爲し遂げ、自己の半生をふりかへり見て、心に疚しきところなく、自快然として、一片の安慰を、良心より得るときは、

この安慰は、即ち天より賜ふところの、最上の報酬なりと心得さるべからず。故に世の婦女たるものは、又よくこの心を心とし、以て其の良人を助け、其の父兄昆弟を勵まさゞるべからず。もし徒に眼前の苦樂を以て、其の良人を責め、其の昆弟を累はすが如きは、大なる過にして、人は盡く逆境にのみ沈み居るものにあらざれば、其の妻女たる人々も、必ず烈女と呼ばれ、節婦と稱せらるゝにあらざるも、よく幽貞にして、良人たり、昆弟たる人々の間に、窮達共に、其の德を變ぜず、從順ならざるべからざるなり。

變時に當りて、激して其の節を全うするは、却りて易きものなれども、甚だ富めるにもあらず。又甚だ貧しきにもあらず。良人に死別かれ、昆弟離散するといふが如き、現然たる異變にあらず。其の事は、日常有勝ちの事にして、而して却り

て、其の德を守り難きことおほきものあり。此くの如き間に處して、よく婦女の品性を失はず、節操を落とさゞるを、眞の庸德とはいふなり。あはれ、世の孃娘諸子。進んでは百般の學藝を修め、退いては毎日の所作を省み、以て大に、眞の庸德を養長せよ。これ啻に、吾人の希望のみにはあらざるなり。

論説

女子四期の心得（第三十六號續）

大林弘一郎

（四）母道

母道（即第四期）は、出嫁して既に子あるに至らば、必ず之に母たるの道なかるべからず。是を母道と云ふなり。凡そ世の人、皆其子を生むに及んで、之を字育せざ

るものはあらず。然らば皆既に、母たるの務を盡くせるが如くなれども、たゞ養育するのみにして、之を教訓することなければ、母たるの道を盡くすと云ふべからず。世人は概ね、之を愛するを知りて、之を養成するの道に通ぜざるもの多し。これたゞに、子たるものゝ不幸にして已むに非ず。母たるもの、、信に已れの本務を盡くさゞるものなり。しかれども、子を教ふると云ふは、算數讀書などを教ふるのみを云ふにはあらず。たとへ、それらの學科は、いかにあるとも、家庭の訓誨は、應對進退の禮より、忠信孝悌の道を全うせしめんために、說話にまれ、讀書にまれ、常に注意すべきの要點なり。さて、この忠信孝悌とは、口には易くいはるれども、之を其身に行ふは容易ならず。まして之を行うて、子弟を率ゐるると云ふは、一層難し。しかれども、既に子あるの身とならば、必ず瞬息の間

として、之を等閑に附すべからず。もしこの子をして、親のなす所を狃見して、遂に行義を誤らしめば、たゞに、その父母たるものゝ辱なるのみならず。必ずその父祖を辱むるものなれば、關係する所、實に大なり。いかで敬愼せざるを得んや。かく云へば、甚だ六ヶ敷ことに思はるれども、決してさることにはあらず。凡そ人には、人の常に注意して履行すべき法則あり。義理あり。これ乃ち、人に存する道なり。先の孝悌忠信の如きは、乃ち道にして、義理法則に於いて、人たるものゝ行はでかなはぬ所なり。而してこれを行ふと云ふも、決してこと更に、之を行ふの時あるに非ず。日常の行事に於いて、すべて心を留め、道に違はざる樣にするの外あるべからず。故に人と生まれたる以上は、男女に論なく、義理を明かにすることほど、肝要なるはあらじ。義理に暗くしては、すべての人事に疎

かなるのみならず。己が行ふことの、果して是か非かをも識別すること能はず。況して子弟を生育教養するの道に於いてをや。いかに人にすぐれたる子をもたんとするも、已れに其種なきに、いかでかよき苗の生ずる理あらん。さて、その義理とはいかにと云はゞ、甚だ平易なる行ひ易きことにて、その中精微にして知りがたきは、甚だ少し。先人の子となりては、孝に止まると云へば、これ乃ち、子の義理の至極を示せるなり。孝の中に、種々雑多の人事は、遺りなく籠もれるなり。人の臣となりては、忠に止まると云へば、乃ち人臣たるものゝ至極は、忠の外なきを示せるものにて、この忠の内に、百般の事業は、漏なく存せるなり。人の親となりては、慈に止まると云へば、乃ち人の親たるものゝ至極は、慈愛にあるを示せるものにて、慈愛の中には、凡百の情義は存するなり。世はいかに移

るとも、時はいかに變はるとも、人に君臣、父子、兄弟、朋友の五倫なき時世は、萬々あるべからず。五倫存する世に生まれながら、五常すなはち、其間に行はる義理常法を知らざるは、人たる責を盡くさゞるものなり。人の母たるものは、則ちこの大躰に通ぜざるべからず。されば、たとひ文學の力少くとも、咏歌の道に拙くとも、其他の技藝に妙ならずとも、人たるものゝ本体を知り、人たるものの義理に明ならば、誠に目出たき人なり。賢母なり。哲婦なり、古來このたぐひの人少からず。よく鑑みて警むべし。子たるもの、幼稚なるときは、必ず母に附從するものなれば、童稚の教養は、殆ど母たるものゝ責務に歸せり。故にこゝに、之を論列して、其責任の重大なるを明にし、以て世の人に母たるべき婦人をして、興起する所あらしめんことを期するなり。

以上四期の順序は、女子の必ず經過せざるべからざる所なれば、その學をなす時に當りて、必ず徒に、文華を弄び、遊技に耽りて、貴重の時期を浪費することなく、人間終身の本務を研究して、人道の實践躬行を謀るこそ、眞の學問と云ふべけれ。若夫れ先に云へる五常の義理の如きは、說も長ければ、他日端を改めて論ずる所あらんとす。讀者其心してよ。

（完）

女子要言　第二篇（十一）

三輪田眞佐子

近來は、女子の天地を廣くし、其の權利の區內を大にし、以て議員の選擧、及び被選擧權さへ得んと、運動する歐米女子あり。我が邦にも、社會改良のため、廢娼を論ずる女子あり。女權擴張のため、刑法中、姦通罪の改正を、議會に請願す

る女子ある今日なれば、餘り以上の女藝區域は、頑固なりと識るものあらん。然れども、此等女權に就いては、別に愚見を述ぶる考へなれば、茲に暫く、其の識を忍ばん。要するに、女子は、飽くまで內事を主として、餘力あるものに限り、良人の補佐のため、一家の便益のため、外事をも行うて、大なる妨げなしとす。好し女子は、內事を知らば足れりと雖も、國民の何たるを知らず、道德の何たるを知らず、國會を以て、見世物場かと問ひ、火山を見て、地獄の烟と迷信する如き女子のみなりせば、到底賢子を產み、以て邦家の進步を計り得べけんや。故に譬へ自ら手を下さずとも、外事の端緒丈は心得ざるべけんや。唯本末の理を知れよかし。此れより極めて簡單に、女藝の一般を例示せん。

而れども、之に先つて附言せん。或は家內細末の區々たる藝能は、少しく高等の

生活をなすものは、自ら手を下すの機會なきを以て、知らざるも妨げなしと。吁、是れ何と云ふ誤りぞや。實に自ら手を下す必要なき人こそ、殊に精しからざるべからざるなれ。恰も百萬の兵士に長たるものは、銃を負ひ、劍を揮るの機會なきも、自ら人に秀づる戰術を知るを要するが如し。故に女藝は、下流のものは勿論、上流の人も、是非知らざるべからず。

第一　裁縫を知らざるべからず。衣類は、人生に於いて、最大要品なり。而して之を作るは、女子にあらずんば男子なり。果して男子、衣類を作るが當然ならば、女子山に登り、薪炭を調へざるべからず。豈斯の如く、顚倒の理あらんや。而して之を作るに、衣と裳の、單衣、袷物より、官服等に至るまで、所謂裁法なるものは、一　高尚なる時風を撰らみ、實用に適する事。二　体裁善く、即ち美術

の意匠を加ふる事。三　迅速なる事。四　將來の利害を慮る事を以て、原則となすべし。蓋し裁縫の法式のみは、聞くと同時に知るを得べきも、唯に知るのみにては、何の用をも爲さゞるなり。世間、口能く其の法式を談ずるも、其の實地針を取るに當り、縮緬物を袋の如くし、袴の襞を反對に折らしむる如きのみならず、甚だしきは、粗布一つ綴るにも、數多の時間を要する如き事實あるなり。思ふに古の女子は、理屈を言はずして、虚心に實地を勉むるを以て、今の女子に、數倍の腕前を有すと云ふべし。勉めよや熟練。且裁縫は、規則通りに裁ち、且縫ふのみにて足れりとせず。未來に於いて、縫ひ直しの自由なる如く、豫め縫はざるべからず。故に兒子の衣裳を見て、立派なる物ならば、腰上げ、肩上げの有無、袵の棒裁、或は鍵裁なるや、將一時の凡俗的流行を計りしや否やを知

らば、其の母の裁縫の極意に明かなるや否やを知らるゝなり。其の他家內の袖裏、裾裏、及び裁方を見るも、其の婦女の一家を興こすに足れりや、才智衆に秀づるや、亦高尙なるや、野卑なるや等、凡て品格をも推量し得べし。人目夫れ嚴なるかな。例之ば、袖の長短、衽の廣狹、及び色の種類に從うて、娼妓流を好む人なるか、御殿流の古風を愛する女子なるかを區別し得べし。或は殺風景なる無色の絹に、二三松葉の金線を繡ひ入れたる如きは、其の人の才智あるを知る。故に女子たるものは、必ず此の藝に達せざるべからず。達するには、師に就くは勿論、上は服色管見より、下は裁縫教授書の類まで參考し、實地熟練するを期せざるべからず。然れども、其れにて裁縫の事終はれりと信ずる勿れ。夫れ此の藝たるや、人類肉体の需用を滿たすに過ぎざるのみにあらずして、大に德義と關

連するものなり。是を以て、女子たるものは、裁縫と禮義との關係を知らざるべからず。詩曰。薄汚我私。薄澣我衣。害澣害否。歸寧父母。とあるは、婦人の綿密なる本分、醜を去りて、禮を務むる德義の意を含むものなり。

第二　料理。　料理に尊ぶべき方法は、先料理の品藝、即ち料理の方法を知り、次は衛生法に適ふを要し、次は食物を有効に利用すべし。其の次は、体裁を能くするにあり。抑も幾何才女とて、漬方を學ばざるものは、大根をも甘味に調ふる能はず。況んや吸物を鹽梅し、珍物を製するをや。此等は、人に就き、書に就きて學び、而して屢實地に試みざるべからず。衛生に適ふとは、決して牛乳、雞卵等のみを用うべしと云ふにあらずして、或物を煮るにも、人體に害とならざる料理をなすべし。例之ば、胃病に、殊更油揚等の物を作るが如し。此等は料理し

て、遂に不消化物に變せしむるものなり。常に斯の如きことなきを促すのみ。徒に山海の珍味を集め、食前方丈の有様は、家を亡す基なり。愼まざるべけんや。されども、人體に必要なる滋養成分は供給せざるべからず。食物を有効に利用するとは、凡て食物の人身に於ける關係は、或程度の滋養のみを要す。然るに世に、鮨を進めて飽きしに、引き續き餅を呈する如き、二重の食物を調ふる家風あり。這は却て、各其の甘味を相殺するのみならず、寧ろ之を害用するものと云ふべし。故に此等の過なきを欲するなり。

日常殊に、茶席、會席の体裁に至りては、頗る考ふべきものあり。即ち等しきものと雖も、其の料理の仕方に由りて、其の味を異にするものなり。是れ天下の諸嬢に、料理學を勸むる所以なり。而して之を裝ふ順序、及び器具に於いても考

へさるべからず。例之ば、漬物を裝ふも、其の置方に於いては、甚だ美に見ゆるものなり。風味を覺ゆるものなり。且汁椀、及び皿、丼等も、其の使用目的に從うて、其の色合、及び形に大關係あるなり。今日天下の諸孃、學校に於いて、和洋割烹を學び、來客の賞譽を得ざるものは、此等の秘訣を知らざるに坐す。請ふ自ら工夫する處あれ。

史談

加茂眞淵の妻

松野操雄

加茂眞淵は遠江の國の人なり。年少き時、濱松の驛舍梅屋某に養はれて、其の女を妻とし、いく程もなく、一人の男子を擧げたり。さるに眞淵は、うまれつき學問を好みければ、家の事どもうちすてゝ顧みず、朝な夕な、たゞ書籍にのみ心を潜め居

けり。大方の驛舍の習として、夕に宿り、朝にたちゆく客人を、送り迎ふる事のしげさに、召し使へる奴婢は、更にもいはず、家族のもの、さては、主人に至るまで、眼を是彼に配り、彼方此方にたち走りつゝ、暇なく働くべきものなるを、眞淵は、それらの事には心をもとめず、一人ひと間の中にこもり居て、文机にうち向ひつゝ、書の中に昔の人の心を尋ね、文字の上に、古の友を求むる事にのみ、ひまなくかゝづらひければ、義父なる某も、大に心をいため、かくては、この家の行く末こそ覺束なけれ。いかで彼をして、少にても、家の事に力盡くさせむやと、折々は、こと嚴しく諭しもしつらめど、中々に聞き入るべくもあらざれど、はては、怒りの心をも、已が娘たるその妻にさへうつして、つれなくもてなしたり。その折の妻の心は、果して如何なりけむかし。父の怒り給ふも、誠に道理に侍り。さりとて、夫をして父の御心に從はせむことはいと難し。又夫の人がらは、かゝる賤しき業をさせ參らすべきにもあらず。父の御心を安めて、家の爲を計らむか。夫に事ふる道を失ひなむ。夫の御爲を思はむか。身は不孝の子となりぬべし。いかゞはせむと、種種に思をこがしゝが、生まれつきての賢き心は、これが爲にくづをれはてず、猶せ

む樣もこそと考へ定めたるこそ、並々の女には、かけても及ぶべきことならね。ある夜、ひそかに、夫に語りけるは、「妾つら〳〵、君の御有樣を見參らするに、逆旅の主人となりて、この世を過ぐさせ給ふべき御身にまさず。今幸に、一人の男子あり。今より妾が手一つにもり育て、成長しめて、此の家をも嗣がしめ侍らむ。君は、心を決めて、終身の策をなし、御名を天が下に揚げ給ふべし」と、いと勇ましくいひ出でければ、眞淵大に感激し、その家を去りて、京師に趣き、荷田東麿に從ひて、國學を修め、終に世に顯るゝに至れり。かくて、妻は、是より、固く節を守りて、他心を有たず、一人の身に、親を養ひ、子を育て、ひたすら、家の事を治めて、數十年が間、一日の如くなりきといふ。

孝女そめ

夏山茂

今はむかし、日向國那珂郡下方村の、藻鹽やく何某が女に、そめといふがありけり、年二つの時、父を喪ひ、もはら母に育されけり、家には、年老いたる祖母と、愚痴なる伯母とがありて、なりはひも、はか〴〵しからねど、月日にそへて、貧しくな

れりしに、そめが五つになれるとし、火災の難にさへ罹りて、家屋はさらなり、多くもあらぬ什器まで、殘りなく燒け失せけり、されど、頓に家居を作らんにも、そのたつきだにあらざれど、塩焚く小屋のうちに、竹床をしつらへて、纔に雨露を凌ぎてありけるに、七八歳になれる頃より、母眼病をうれへて、家產ます〳〵おとろへけれど、そめ幼き心にも、かくてはかなはじと、おろかなる伯母ながら、之と力をあはせ、朝夕稼ぎけれども、年齒もたらぬ女の身なれど、いかにともすべきやうなし、たゞ僅に一嚢の塩を擔ひて、近き里の、知る人々の家に鬻ぎ、米麥などにかへて、細き烟をぞ立てける、然るに伯母は病にふして遂に死し、母は眼病ます〳〵劇しくなりて、いつ癒ゆべしとも見えざれば、ほと〳〵當惑にくれぬ、こゝに全郡福島に、良醫のあるをきゝ、いかで母を伴ひて、一度治療を請はんとおもひつれども、いかにせん、一錢のたくはへもなく、せんすべだになかりけれど、近隣の人にはかりて、これを借り、漸くにして、福島にともなひ行けり、これそめが十二のとしなり、嗚呼たぐひまれなる孝女にあらずや、大かたの少女ならましかば、たとへその家は貧しくとも、貧しきことをも思ひたどらで、あれ求めてよ、これ買ひてよと、物

ねだりするが常なるを、そめは五つ六つのころより、さらにさることなくて、その近隣に借りたる錢をも、鹽の價を、少しづゝのこしおき、年をも經ずして、之を償へり、いつしか年月たちて、祖母はいとゞ老耄し、母はつひに盲目になりしかど、晝は兩母の看護のかたはら、みづから薪を伐りて鹽をやき、あかつきごとに、星をいたゞきて家をいで、焚きたる鹽をひさぎつゝ、千辛萬苦をつみ、男夫も及ばぬほどに立ち働けども、いさゝかも倦めるけしきだになし、かゝる貧しき中にも、二人の老母には、より〳〵魚肉をも求めてすゝめけり、やう〳〵十四五になりて、姿色も人並にすぐれたれど、つゆかいつくろはでありけり、夜ふすとても、たゞ一つの蚊張と、一つの蒲團の外なく、蚊張は破れはてたるをつゞりあはせ、蒲團はちいさくて薄く、兩母の寐具にも猶足らぬ程なれど、おのれは、夏冬つゞりを着ながら、側に打ちふして、いまだ嘗て、一日も心を安く暮らしゝことなし、かくて慶應四年三月、もとの飫肥藩の知事、郡をめぐりけるとき、そめが行狀をきゝ、感歎のあまり、米五斗を與へて、その孝義を旌表せり、これ實に、そめが十六歳の時なり、そめこれを、いたくかしこまり歡びて、いよ〳〵ます〳〵、孝養をつとめしに、そのとしの五

月に、祖母はなくなれり、母はまた、盲目となりてより、數年になれるほどに、帶下をうれへ、飯を食はずして、たゞ酒と菓子とのみをたしなみけれど、常に求めて、これを供し、夜もいねやらで、ひたすら看護に怠りなかりしに、つひには、病巳に崩漏といふになりて、時々裳裾を汚し、その臭穢にして近づきがたきをも、さらに厭はしきさまなく、洗ひきよめて、朝なゆふな、母の心をなぐさめ、侍養まことをつくしけれど、同じ月の中頃より、病いとあつしくなりて、百方その効なく、つひにみまかれり、そめ死屍のかたはらに打ちふして、慟哭聲をうしなひ、轉倒爲んすべをしらず、見るもの、みな袖をしぼらざるはなし、一月がほどに、ふたりまでうしなひし事ゆゑに、まだ廿にも三つ四つは、たらぬ女のいはけなく、貧しき身もて、いかでは、喪祭の儀をなしうべき、途方にくれてゐたりしを、親族近隣の者ども、打ち語らひて、かたの如くに營ませけりとなん、

その後ある人、そめが大人もおよばぬ行狀をきゝ、いたく歎賞し、そがもとにとぶらひ行きて、これをなぐさめ勞り、さて汝をさなくて、父をうしなひ、祖母と母とに仕へて、十年余をへ、今日にいたれりとか、その間、何事か困苦の、もゝも甚じ

かりし事ぞ、われに語りきかせよといへりけれど、そめ涙をはらひて、妾まづしき家にうまれたれど、困苦はもとより、あへて厭はざる所にして、三日くらはざるも、一錢なきも、少しも困苦とおもはず、暑に日を掩ふことあたはず、寒に衣きることをあたはずと雖も、また困苦とするに足らず、たゞひとつ、困苦にたへざる物侍り、母の世にありしや、常に妾にかたりて、家火災に罹りしより、この矮屋におきふしするが、いとわびしきを、はやく新宅を營みて、うつりすまむやといへりしかど、もとより朝夕の烟だに、たてかぬる身に侍れど、母をして、その願をとげしめず、つひに死せしめき、今これをおもひ出で侍れど、食も甘からず、居も安からず、これ妾が一生の困苦なりとこたへしを、つくづく聞きをはり、鼻うちかみて、その志をふかく憐み、米一俵をおくれるに、そめ固く辭みてうけず、或人之をとひて、こはいといさゝかなれど、汝が孝行を感づるあまりに、何をがなと思へる情を表したる迄なり、願はくは汝これを、母の靈前に供へよといへりしかど、そめ涙をながしてうけゝり、そのとしそめ年二十なりきとぞ、

われこゝに至りて、はと〳〵いふべきことのはを知らず、たゞ感涙のはふりおつる

のみなり、世の孃等は、いかに思ひ給ふぞ、

家政

看護法捷徑（十六）

三笠舍主人

第二編　治療の輔助（つゞき）

（三）吸入法

一 吸收法とは、喉頭、氣管、肺臟等の病に於て、藥液を細霧狀、若くは蒸氣と爲して、鼻、口、より吸收せしむる法也、此藥液に、揮發性（蒸發し易きもの、）のものと、不揮發性のものとあり、

二 揮發性の藥を、吸入法として用ゐるには、先半巾の如き布片を疊て、手掌の上に置き、之れに藥液數滴を滴して、直に病者の鼻、口、の前に保持し、吸氣に沿て其吸入せしむる也、又一法は、沸湯を磁器に盛り、其中に藥を滴下し、漏斗にて其上を蓋ひ、其漏斗の管の端に、布又は紙を纏ひて、之を口中に銜み、徐に呼吸し

て、藥液を吸入せしむ、若急に吸入する時は、眩暈を興す事有、極て安靜に吸はしむべし、

三揮發ならざる藥物を、吸入藥として用ゐるには、吸入器と名附くる一種の器械の力に依りて、藥液を細霧狀と爲して、吸入せしむるなり、此器械の用法は、現物に付て習熟すべし、

四吸入法を行ふには、大なる油紙、若くは布片にて、病者の衣服及び臥蓐等を被ひて、其濕潤を防ぐべし、

五吸入法を行ふ時間、度數、及藥品の分量等は、皆醫士の命に從ひて定むべし、

〔三〕點眼法

一點眼法とは、眼中に藥液を滴點する法にして、點眼管と名る硝子の管を用ゐる、此管は大さ筆の軸に等く、長さ二三寸にして、其一方の末端は稍細く、他の端には、短きゴム管の、一方口閉ぢたるものを、接續したるものなり、

二點眼藥を用ゐるには、先病者を倚子に據らしむるか、若くは坐位に在りて仰首せしむるか、又は仰臥せしめ、看護者は、右手に、右の點眼管のゴムの部を强く撮

み、管の細き末端を藥液中に入れて、撮みたる指を緩むる時は、藥液自然に管中に昇り入るべし、此時、左の示指にて、輕く病眼の下眼瞼を下方に牽きて、眼を開かしめ、管中に藥液の昇り居る點眼管を、右手にて其儘、開きたる眼上に持來り、再び徐にゴム管を輕く撮みて、眼中に一滴宛藥液を滴下せしむるなり、此際、左手の環指、及小指の尖頭を、病者の顳顬に支ふべし、然らざれば、病者不意に身を動かして、誤て管端にて、眼を刺すの恐あり、

三 膿汁流れ出るもの、若くは閉ぢ合ひたる眼は、最初罨を用ゐて、微温湯にて能く洗ひて後に、藥を點ずべし、但、膿汁流れ出るものは、恐るべき傳染性有ものなれば、妄に手を觸れず、必ず醫士の命を俟て爲すべし、

四 點眼法を行ひし後は、或は輕く繃帶を施し、(醫士の命に依る、)又は其儘に爲し置、病者に諭して、眼を摩擦せしむべからず、

(四) 注入法

一 注入法とは、口、鼻、耳、肛門、尿道、又は腫物の開口したるもの、或は創傷等に藥水を注入する法にして、或は其部を清淨に爲し、或は其部の病を治するの、

目的に用ゐるものなり、而して面の廣き部に、多量の液を用ゐるを、灌注法と云ふ、

二此法を行ふには、水銃若くは灌水桶を用ゐる、但、其嘴管は、成るべく孔口、若くは創面に、直に觸れしむべからず、其注入力の強弱は、病症に従て斟酌すべし、流出づる汚液は、他の清潔の受器を用ゐて受くべし、

三此法を行ふ時も、亦大なる布片を用ゐて、豫め衣服、臥蓐、を被ひて、其濕潤汚染を防ぐべし、

料理法增補（二）

待月𦬇

おなじく

向附　鱠、かき大根、うど、くらげ、雲丹酢、

汁合みそ　青昆布、しめじ、

椀盛　鯛角切、煎海鼠木口切、葛あん、わさび、

燒物　小鳥

吸物　水仙寺のり、
八寸　煎牡蠣、くろぐわゐ、
おなじく
向附　鯛作り身、雲丹和へ、おろしかぶら、みやうが甘漬、
汁白みそ　筍せん、小しひたけ、
椀盛　いせ海老、生薑しぼり汁かけて、白髪葱、
燒物　しほさはら、
吸物　海苔、こしやう
八寸　燒ゆで角、からすみ、
おなじく
向附　白魚湯びき、あさつき、酢みそかけて、
汁　菜の花、おとし辛し、
椀盛　鮑大へぎ、わかめ、たま子せん、
燒物　鯛、

吸物　つくし、さき梅、
八寸　焼鳥、くるみ、
おなじく
向附　細魚、わさびあへ、ぢうふう、うど、
汁白みそ　いはたけ、よめ菜、ゆぢ、
椀盛　貝のはしら、寄鶏卵、蕗糸、推たけ、あらめたんざくに、
焼物　鱒又は焼、
吸物　萱の實、
八寸　松露、海老、
おなじく
向附　鱒作り身　芥子みそ酢、くらげ糸、みる、わさび、ぢうふう、
汁合せみそ　豆皮、いは茸、
椀盛　鯛切身、蕗、粒又ひたけ、つまみ芋、
焼物　馬鮫又は蒸、

吸物　水せんじのり、　針生薑、
　八寸　鞘豌豆、　鮑、
　おあじく
向附　鯡子付、　獨活、　防風、
汁合みそ　ちさの莖せん、　ゆで、
椀盛　煎海鼠、　葛煮、　たまごせん、
　燒物　小鯛
吸物　雲丹、
　八寸　木の葉かれひ、　さやゑん豆、
　おなじく
向附　さばら作り身、　大根、　鳥頭海苔、　ちさ葉、　辛しみそ酢、
　汁　けしの葉、　いはたけ、
椀盛　大海老、　葛たゝき、　せんまい、　さや豌豆、
燒物　鱧骨切、

吸物　小梅青つけ、
八寸　しゝみ、青昆布、
おなじく
向附　鯧魚、芥子味噌酢、木瓜、紫蘇、
汁　葉付大こん、木の子、
椀盛　鮑せん、くずあん、わさび、
燒物　餘王魚一しほ、
吸物　蓴菜、
八寸　煮ぬき玉子、あらめ、

家政雜事（三）

衣類に酒のしみたる、洗はゞ其の光澤うせ、又しみたる部分のみ漱がむ、汚班つきて、殊に見苦しきものなり、されど、洗はずして之をぬく法あり、そは、藤の花の陰干にしたるを、酒のしみたるところの上下におき、なほ其の上下よ

紙をおき、つよく重石をかけ置くなり、しばらくずれど、藤の花酒氣を吸ひとりて、少しの跡もなくぬけるなり、さて藤の花は、常にあるものならねど、今咲けるを、陰干になしおき、不時の用にあつべし、

搗米、　夏は搗米に、虫わき易きものなれば、糠と共に貯へ置き、入用のとき、篩ひわけて用うべし、

茄子を久しく貯ふる法、　まづ茄子を、莖を長くつけて切りおき、さて平たき桶に、鹽を入れ、其の中に、鹽より一寸程上に、穴をいくつも開けたる板のかゝみを入れ、この穴に、茄子の莖の、鹽まで届く樣に、さし込み置き、桶の口を、固く封じ置くなり、しかすれど、いつまでも色變はることなし、

又、茄子の出たてに、疵のなきを択りて、燈油の中に漬けおくなり、いつまで立ちても、出たての如く、色變はらずして、よく持つものなり、これを料理するには、ざつと湯煮をなして用うべし、並にあとの油も、用ゐらるゝなり、

又、茄子のとりたてを、いくつにても、砂一斗に鹽四升の割合にて漬けおき、入用のとき、鹽をいだしてつかふべし、漬樣は、砂（鹽とませ合はせたる）を一ぺんふりて、茄子を一並びおき、せんぐりに、いか程も、かやうに漬けおくなり、この法も、色かはらざること妙なり、

學園

日本文典（承前）

杉谷正隆

○體言

體言とは、有形無形に係はらず、すべて語尾の變化せざる詞を云ふ、これを分ちて、左の五種とす、

第一　名詞
第二　代名詞
第三　副詞
第四　接續詞
第五　感嘆詞

第一　名詞

名詞とは、有形無形の事物の名を呼ぶに用ゐる語を云ふ、

名詞を分ちて、左の四種とす、

第一　普通名詞
第二　固有名詞
第三　抽象名詞
第四　數詞

第一、普通名詞とは、有形の事物にして、廣くわたりて呼ぶ語を云ふ、例へば、くに國、ひと人、はな花、とり鳥、むし虫、けもの獸、こがね黃金等のごとし、

第二、固有名詞とは、有形の事物にして、一事一物にかぎりて呼ぶ語を云ふ、例へば、日本、日本武尊、富士山等のごとし、

第三、抽象名詞とは、無形の事物にして、人の思想上に浮び、一種有るものとして思ひなさるゝ語を云ふ、例へば、あめ天、そら空、はる春、なつ夏、いにしへ古、いま今、ひがし東、にし西、こゝろ心、たましひ魂、いさを功、あか赤、しろ白等のごとし、

第四、數詞とは、事物の數を呼ぶに用ゐる語を云ふ、例へば、ひとつ一、ふたつ二、一寸、一尺、一合、一舛等の如し、

又名詞は、右に擧げたる四種の外に、左の五種より成れるものあり、

第一　作用詞より變じて、名詞となれるもの、
第二　形容詞より變じて、名詞と成れるもの、
第三　作用詞、形容詞の語尾省かりて、名詞となれるもの、
第四　名詞と名詞とかさなりて、一つの名詞となれるもの、
第五　名詞と作用詞、形容詞とかさなりて、一つの名詞となれるもの、

本邦女子文學略傳（第三）

目黑和三郎

伊勢

彼の一條院の御世に輩出せし才女に先ちて、はやく仁和、延喜の頃に、文學を以て、名高く世にもてなされしは、この伊勢を以て、はじめとすべし、伊勢は、伊勢守繼蔭の女なるを以て、伊勢といひしなり、（今昔物語に、大和守藤原忠房の娘なりといへるは、恐らくは誤ならん、）伊勢わかきより、きはめて物の上手にて、和歌の道には、その頃の躬恒、貫之にも劣らず、はじめ仁和の頃、七條の后の宮温子に仕へた

りしが、形貌、心ばせ、共にめでたくありければ、やがて宇多天皇に召されぬ、御寵愛いと深く、御子桂の宮(即行明親王)を生み奉りしを以て、是より伊勢の御息所とも、又伊勢の御とも尊みいへり、然るに、宇多の御門、位をおりさせ給ひて、法皇とならせ給ひてよりは、大内山といふ所に入りて、佛道をのみ行ひすませ給ひければ、伊勢も、世の中をあぢきなく思ひ、家にのみ籠りて、いと淋しく、年月を經ることゝぞなりぬる、古今集雜部下に、伊勢の歌とて、家をうりてよめる、

飛鳥河ふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける

といふを載せたり、されば、遂には零落して、この世を終りしものなるべし、

伊勢の後々に至るまで、歌人などに尊まれし事は、能因法師、他に出づる時、二條東洞院の所にかゝれば、常に車を下りて、數町の間歩行す、人その故を問へば、彼所は、伊勢御の家跡なり、彼の御の前栽の結松、今に殘れり、いかでか車ながら過ぐべきぞとて、その松の梢の見ゑん限は、車に乗らざりきといへる一事にて知られぬ、又その才學のめでたかりし事は、醍醐天皇の皇子の御袴着の料にせさせ給ひし屏風の色紙形に、和歌をよみて、そを小野道風が書きたりといへる一事にて知ら

れぬ、此は伊勢の一代中の名譽の事なれど、左にその事實を略記すべし、
宇多天皇の法皇とならせ給ひて、伊勢の淋しく、年月を送りける程のことなりき、醍醐天皇、御子の御袴着の屛風を調へさせ給ふに、その色紙の和歌を、當代の歌人に勅して、よましめ給ひけり、さてその書人は、小野道風にてありけるを、道風はしつかたより書きもて行くに、春の帖に、櫻の花のさきたるに、女車の山路行きたる繪をかきたる所にいたりて、その歌一ツ足らざりけれど、天皇も御覽じて、此はいかゞせんとする、今日になりては、俄に誰がよみいづべきとおぼし案じ給ひしが、やゝありて、伊衡少將をめして、汝只今、伊勢御息所の家にゆきて、云々の事あれど、即時に詠進せらるべきよし申せと命じ給ひき、伊衡承りて、伊勢の御の家にいたり、云々のよし傳へけれど、いたく驚きて、かねて仰せありて詠まんにも、いかでか貫之、躬恒などの樣にはあらん、まして俄の事にしあれば、いとわりなき命ごとなり、おもひかくべき事にもあらずといひつゝも、さてやむべきにもあらねど、暫し伊衡をまたせて、紫の薄樣に歌をかきて、同じ色の薄樣に包みて出だしけり、伊衡いそぎかへりて上進りければ、天皇こを開きて御覽ずるに、道風にもおと

らぬ手して、
ちりちらず聞かまほしきをふるさとの花見てかへるひともあはなん
とぞかきたりける、天皇をはじめ奉り、御前に侍ふ上達部、殿上人、皆めでたがらぬはなかりきとぞ、これぞ伊勢が、終生の名譽にてはありける、伊勢終年を審にせず、伊勢物語は、この御の著なりなどいふ説あれど、詳ならず、
因にいふ、古今集に、「仲ひらの朝臣、あひしりて侍りけるを、かれがたになりにけれど、父が大和の守に侍りけるもとへまかるとて、よみてつかはしける、」といへる詞書にて、歌をのせたり、されど、今昔物語の、大和守藤原忠房の娘なりといへるも、誤にはあらじか、此は大方の敎を請ふになん、又右によりて、伊勢が枇杷左大臣藤原仲平公となれたる事も知れぬ、こは七條の后宮に宮仕えける折の事なり、
人しれず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを
といへる歌は、伊勢が仲平に贈りし歌なり、文學の事は兎まれ、貞操の上は、この伊勢の御には、許されぬことなるべし、

漫録

大和魂

眞金乃舎

色をましたる柳、枝をたれたる花も、えもいはぬ匂ひを散らし、外は盛りのすぎたる櫻も、今むかりにほゝゑみ、ろうをめぐれる藤のいろも、こまやかにひらけゆきたり、まして池の水にかげをうつしたる山吹、峯よりこぼれて、いみじきさかりなり、

柴の庵も、『自然』が作りなしたる四時の光景に飾られて、これも亦まことのしらぬ國にきたらん心ちして、哀れにおもしろく思ふも、主人一人の僻言に非ざるべし、卓を分つて山妻と源語を讀む、少女の卷、

思ひ給へおきて侍る、たかき家の子として、つかさかうぶり心にかなひ、世中さかりにおごりならひぬれど、がくもんなどに身をくるしめんことは、いとゝほくなんおぼゆべかめる、たはぶれあそびをこのみて、心のまゝなる官爵にのぼりぬれど、ときにしたがふ世の人のしたには、はなましろきをしつゝ、ついせうし、けしきとりつゝしたがふほどは、おのづから人とおぼえてへんでとなきやうなれど、ときうつり、さるべき人にたちおくれて、世おとろふるするに

は、人にかゝるめあなづらるゝに、かゝり所なきことになん侍、猶ざえをもとゝしてこそ、やまと玉しひの世にもちゐらるゝかたも、つよう侍らめ、さしあたりては、心もとなきやうに侍りとも、云々、

に至り、山妻と語りて云はく、この『やまと玉しひ』といふは、畢竟絶對的の言葉にして、やまと、からなど、對へていひたるには非ざるべし、去るを後世に、和魂漢才などいひて、之を相對的の語となしたるは、いみじき僻事ならずや、大鏡に、時平公の、世の奢侈を停遏んとて、其の身の耻辱を堪忍びたまひし事をさして、

　やまとだましひなどは、いみじくおはしましたる、

とあり、又赤染右衛門の歌に、

　さもあらばあれやまと心しかしこくば
　　細乳につけて在らすばかりぞ

といへる、みな絶對的の語たること明かなり、鈴屋大人の「大和心を人問はゞ」の詠の如きは、もと我皇御國を頌へましたるものなれど、即ち相對的に大和の二字を冠したるにて、以上の例とは、全く異なれり、其の外は大和心、大和魂等、和歌、文章に見ゆるもの、或は志氣を稱し、（今昔物語に善澄被殺の章に、「露大和魂なかりけるとある類、）或は才幹を（百寮和歌に、「あたらしき書を見るにもくらからじよみ開きぬる大和魂」とある類、）稱したるも、要するに、絶對的に大和の冠辭を用ゐたるものにして、『精神』の美稱と見て可な

り、
抑も精神即ち大和魂、大和心は本にして、學術、文章は末なり、いかに大家の講筵に侍したりとて、いかに万卷の書を繙き、完全なる試驗室に出入したりとて、心一つの詮めどころがわからざれバ、何を以て運用自在なることを得ん、西洋にて數學を重んずるは、精神を錬磨するがためにして、言さへぐ外國人すら、理の修養なけれど、事の働きなしといへり、才をのみこれ求めて、大和心を外にしては、徒に學問の奴隷となり、君を尊び、國を護るすべさへ知らずなりて、王朝の縉紳と、其の誹を一にすべし、前に擧げたる赤染右衛門の和歌の心を以て心となさど、わりて甲斐ある母とこそいふべけれ、

兩人相見て笑ふ、遂に書して世の姉妹に問ふ、

おもひぐさ（つゞき）

藤井行麿

○ふみわけてこし跡だになき、庭の萩はら、こととふものは風のみにて、いとゞ身にしみつ、色えぬ心は木の葉と共に、うつろひゆく秋の夕ぐれ、今さら、まつとはなき物から、うちしを見れたる淺茅が末の露のそこより、心はそら、なきいでたる松虫も、たれをかとおもへど、人わろく、涙のこぼるゝもつゝましくて、まぎるゝかたもや、と手すさみのやうに、かいつく手つき、いとなよよかにて、打ちみじろぐさまも、らうたしや、風にふかれて、横さまに立ちのぼるけぶりのゆくへも、

つく〴〵とうちながめられて、あはれ、つらきかたにも吹きつたへてしかな、さらば、人しれぬ我思ひも、空にしるくや見ゆらむとおもふこそ、中中の心のもよほしならめ、

○ふつゝかに、ふとり過ぎたるげすをのこの、顔にくさげなるが、くつろかにうちあふぎ、髭かい撫でゝ、くはへいたるは、引きはなちても捨てまほし、

○かりそめに、ものしたるまらうどにも、すべて、取りあへず、まづ出だすものなるを、すかぬは、ようなしとてかへしたる、はえなきものなり、

○こゝち例ならず、なやみ居て、はかなきくだものなどをさへ、いとものうくしたるをりにも、いさゝか、をこたりさまなるには、まづおもひ出づるぞかし、常にすけける人の、きよく遠ざけて、日數ふるは、とぶらひきたる人などにも、しか〴〵なむ、さぶらふなどもいぶかし、

○水無月廿餘日のひるつかた、扇の風も、世にぬるくおぼえ、ゆふかせ、まちつくるほども堪へがたくて、軒近う、うたゝねしたるに、ふと目さめぬれば、かたけしる方の、汗にしめらひて、いとものむつかしく、あつさ陋せきを、目する〳〵ひきよせて、火たづぬるも、あながちなりや、今ぞ、すこし庭の梢も、うちそよぐほどなる、

○あまり、したしくもあらぬ人のもとにて、物がたりし、例の出だしおきたる、はやく消えぬる、たゞよさしおくが、くちをしければ、あるじや心つくと、しむしかきさぐりゐるを、とく見て、人

呼びたるはよし、こゝろやすきわたりにては、いかにもせむを、

○わら〳〵しく吹きしをりし嵐も、なごりなくのどまりて、前栽の梢も、いとゞさびしく、木のもとに朽ちのこる落葉も、朝霜ながらの氷にうづもれ、空さへ、雪氣にうちくもりぬる夕暮、やゝちりくる花にぞ、春のとなりの近けれど、すこしさう〴〵しさもなぐさみて、ながめいだせるに、ねぐらにかへるゆふがらすの、三つ四つ二つなきわたるも、いと寒げに見ゆ、かくしつゝ、はやくれ竹の葉ずゑなどより、やう〳〵白くなりゆくほど、さすがに、まだものゝけぢめも見えわきて、やり水のほそうて、殘りたるなどもをかし、門外の人のけはひも、いたうしづまりて、つれ〴〵なるよひのほど、庭に跡をも、いかゞはいとひあへむ、そも何ばかりの心ざしにてかは、かゝる雪もよに、ものする人のあらむと、うむじゐたる折しも、門の方に、いりくる人のけはひぞする、袖うち拂ふほども、こゝろもとなくて、はし近く立出でつゝ見れど、わけくれになう、むつびかはす人のこゑにて、いかゞものし玉ふ、こよひの雪を、ひとりもてあそばむことの、かたはなるこゝちし侍りてなむなどいひたる、うれしくて、いでや、こゝにも、心ばかりはかきわけて、おもひやり侍りしかど、（新古今　いまぞきく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども）習はぬ夜のありきは、ものうくてなんなどいらへつゝ、おくのかたに入りて、いとおほきなる火桶に、炭こち〳〵しうおこし、つと寄居て、何くれと、昔今の物語

りしつゝ、よひ過ぐるほど、いとすごく、しめ〴〵と心ぼそくて、雪折の音のみ、しば〳〵きこゆるに、降りつもる程も知られて、こよなうさむしや、あかずむかひゐたらむほど、例のけぶりは、今さらにいひたてずとも、空にしるべし、夜やう〳〵更けゆけど、歸るよしゝて、こゝろなき長居の浦を、下部などや、海士のすむ里のしるべとおもひ侍らん、ねぶたうぞおはすらんなどいひつゝ立ち、なにかは千夜を、一夜にともおもひ侍れど、（伊勢物がたり 秋の夜の千夜を一よになずらへて やちよしねばやあく時のあらん）御心とまるべき、くさはひも侍らねど、しひて今しもしとも、いかゞは聞えさせむ、ふりはへて、とはせ玉ふみこゝろざしは、さるものにて、雪こそ深く侍るなれ、道のほどもおぼつかなし、あかりの御まうけやさぶらふ、まゐらせてむやなど聞えつゝ、ずさ呼ばすれど、ねぶり居たるが、顔ふくらし、あくびうちして、走りくるもをかし、立出るほど、おくより、わらはべ御たばこいれなん、殘りて侍りしとて、わらはべのもて出でたる、こは忘れにけりとて、ふところにさし入れていぬめり、

村田春海 歌がたり （承前）

松野操雄

今、深くおもふに、みじか歌は、いにしへより、世世にすぐれたるうた人も、多く出でゝ、めづらかなるたくみ、おもしろきふしも、いひつくしたれど、今は、いかにおもひはかりても、みな、いにしへ人のあとのみ、ふまでは、えならぬわざにて、あ

たらしく、いひ出でむふしは、かたかるべし。ただ、長うたは、古今集のころより、こなたにれ、こを、むねとよめる人もなく、ことなるふし、いひ出でたるひともなくて、世々に、歌數もすくなければ、いにしへの人の、おもひのこせるたくみも、いひもらせるふしも、おほかるべし。かく、くだりたる世にして、めづらかに、あらたなる事を、ひとふしよみいでゝ、いにしへ人にも、はづまじきわざを、なしえてむものは、たゞ、長歌なり。今より後の世に、詞のはやしに遊びて、この道に、才かしこからむ人は、こゝに、心をふかめむ事こそ、あらまほしけれ。

今、長歌をまねむに、三つのすがたあり。藤原、奈良のみさかりのすがたを、うつさむは、上の品といふべし。また、いにしへと、後の世の詞を、まじへもちひて、よく、そのすがたをとゝのへて、あやなさむは、中の品成るべし。また、詞を、いにしへとは引きかへて、專ら、古今集よりこなたの、なだらかなることどをのみ、もちひて、すがたは、古のいきほひを、うしなはずなさむは、また、ひとつのすがたなれど、中の品にぞつゞくべき。この三つのすがたを、年月に、よく學びえて、われと、ひとつのすがたをもなさむ、おのづから、後の世にもつたふべき歌なむ、いできなまし。こゝろあらむうた人は、こゝに、ものうくなせそっ

反歌は、長うたにいへる事を、うちかへしいへるあり。また、長歌にもらしたる事を、反歌に、はじめていへるもあり。一首の長うたに、二首、三

首、反歌有るもあり、また、反歌なくて、長歌のみなるもあり。くはしくは、萬葉集に、さま〴〵、載せたるを見て知るべし。さて、こを反歌といふは、長うたに、ひとたび、うたひつらね、また、ふたゝび、短歌もて、打ちかへして、うたふより、おほせたる名なりけり。さるを、ふるき髄腦どもに、短歌の事を、反歌ともいふなりと、おもへる說のあるは誤なり。こは、かならず、長歌にそへたる時にのみ、いふ名なりけり。この事は、はやく、仙覺律師の、しるせるものに、後の世に、おもひあやまれることを論じいへり。

清原大人の怜野集、えらびすでに成りぬれば、板にゑりて、うひ學びのたすけともせり。又織錦の翁が歌がたりのうちに、おほよその心を論じいはれたる一卷あるを、こたび、翁にこひねて、しりへにのせつ。さるは、わらはべなどの、詞の林、わけまどはざらむ道しるべにもとてなむ。是は、信濃人池田畝平、池田顯等、難波人紀侚風と相はかりて、かくは物しつるなり。

文化五年七月　　正木千幹識

（をはり）

井蛙小錄　　井上頼文

六月　天王祭（今の日本橋小舟町八阪祭）

瀧澤解（馬琴）

此御代久しく治れるにしたがひ、よもの民くさやう〳〵しげり來て、いよ〳〵ます〳〵みさかりにさかりゆくめれど、八百まり八つと定め給へる、

大江戸のちまたさへ、おのづから、所せきて、今は千々のまちとぞなれりける、かく、ひろきむさしのを、なほ、ひろしともせで、むなぎをあはせ、軒端をなめて、いへゐ、みち〳〵て建つらねつゝ、こゝにつどひとゞまれるひとの、おほき、いくそばくぞ、はた、おのが、まに〳〵世のわたらひでといとなみて、四の時やすらに、たのしめることは、いはまくもかしこき大君の御惠みにこそあなれ、さるをこの百とせまりむかしべにや有けん、ときのけ世に行はれて、たかきもいやしきも、みな、そのけにふれて、にはかに、とぢめつるものあまたありけれど、このえやみの神をやらふには、祇園會するにしくものあらじと、まちの長ども、つどひはかりて、おほやけにこひまつり、千はやふる神田のみやしろに、三神のおなじうしたまへる、祇園三社の神輿をいだしまつり、まち〳〵をかいもてありきしに、ときのけ、とみにさめ、民からうじて、命をまたくせるものおほかりける、こや、御神の御いきほひ、ことにいやちこなりとよろこみて、それよりのち、とし〴〵のみな月には、このまつりをなん行ひける、かつ、祭の日も、ふるくより定ありて、まづ、大傳馬町は五日より七日まで、南傳馬町は七日より十四日まで、小舟町は十日より十三日までなりとぞ、いづれも神輿を出しまつれるの日、十町、あるは、二十町定ある町町は、もらさず渡れるとなん、そが中に、南傳馬町の神輿は、いちのかみのみまへより、御城のみはしのなかばまで、かいもてゆくを、ことにめで

たきためしとはすなり、祭あたれるまちれ、はゞある幟おしたて、いへのまへに、とうろ、かけそるて、ゑせ繪師のつくり繪に、秀句こちたくかいつけたり、あるは、はしとみのもとに竹うゝるいへあり、あるはさゝの葉にかはほりつけて、二かいのまどにさしたるもあり、あき人は金門、はき清めて、おくまりたる所に、いよすかけわたし、もひに、ひさなはもりならべて、人にもくはせ、おのれもたうべ、盃ずんながしてたのしめり、もちひうれるもの、ゑみづうれるもの、くさはひたちこみて、よひよりそゝぐりあへり、神輿わたらせ給ふきざみは、たちつけのはかまに、ふるぎの革羽織着たるをのこ、かなぼうひかめしう引ずり來れるあとべより、四の神のかたつくれる旗と、かぐらの太鼓もてるをとこ、いくたりともなう、蚊といふむしのあくがごと、ひとふしにつゝじりうたひ來るには、何事をいふにか、さらに、聞わきがたし、扨そのつぎに、三つばかりなるうなゐ子の、ねばしの上に、はちまきして、そらのいろしたる、くゝり染のひとへのかた袖ぬぎ、くれなゐのはだ着ながらに、まくりでして、おやのかたにかゝりたるが、おもぎらひせる、たぢろきさへなく、いとおとなびて、けにくう見ゆ、よるべなき人は、ちまたにすだき、あつき日かげのかしらおもげにて、汗もゑどゝに、拭ひあへず、神輿をろがみてんと、うんじてまちゐたるに、うちかひて、よゝはゝとはうしとりて、白張着たるよぼろ、二三十人肩もたゆげに神輿かいもて來れぞ、ゆでめてよ

りうちかくる、初穗のせに、ほろ〳〵と飛ちがひたるを、みな、ひらはんとて、あしなみしどろになりて、かみもさながらたゆたひ給へるにやと、をかし　かくらうがはしきうちに、何事かものあらがひいで來て、いちはやくむかひ火つくるより、まけじだましひのますらをら、黑きかひなに、靑くいれずみしたるはだへあらはし、髮さへふりみだして、かたみに、にぎりうちて、そばるゝを、とかくしてしりへよりいだきとめ、双のかひな押たわめ、こうじて引わけたるに、とくむらだちたるくんずに、人の闘すゑられて、そを仇、こをかたうどゝもしらずなりて、あらそひも、はやうとけたると見ゆるに、すこしおくれて、さうぞきしたる、はふり三たりまで、顏はむげに、日くろみたれど、はなしろめるけはひもなくて、馬にのりたるぞいとなめげなる、こも、過がてになり行くままに、いつしか祭もはてぬとみえて、みちかひたちこみし人もちりて、おのがまに〳〵歸りゆくもあり、猶とゞまりて、酒もり遊べるも有けり、さしも今朝より待つけたる祭の、束の間にはてぬるは、いとはいなきこゝちやすらん、抑大江戸にして、祇園會行へるは、此三つの町のみにもあらず、四つ谷、品川、千住のうまやぢも、猶ありとかや、おのれ、つまびらかにも見ねど、こゝにもらせり、されど、此みまつり、はてぬれど、なべて、ねやみのうれひなしと、むかし人のいひ傳ふめる、こは、御神の御いさはしとまをさむや、はた、下が下までおす給はざる大君の御ひかりとまをさむや、神

と君との御誓ひは、いやしき身もてしりうべきにあらねど、只此の祭の長へに行はれて、御いつくしみに、うるはひ出る、青人草のしげりわふべき、御代のさかえを、ほぎまつるになん、

筆のついで

昨非生

盗も五女の門を過ぎず

人の家を富まし、人の家を貧しうするは、大に婦女によるものあり、陳審が上疏に曰はく、「鄙諺に言はく、『盗も五女の門を過ぎず』と、女は家を貧しうするを以てなり、後宮豈に國を貧しうせざらんや」と見えたり、こはこれ數千の宮女妃嬪が、紅粉を凝らし、綺羅をきそひ、媚を王宮に衒ふ其の貲費の多き、國用を窮乏するにいたる其の弊を、論述矯正するに引用したるなり、嗚呼かの鄙語、以て婦女の誡となすべし、もし鄙語をして飜さしめば、婦女は、以て家を富ましむべし、

教ふるに吝に嫁するに財を厭はず

世の女子を養育するもの、其の女子を教ふるに、財を吝み、學校にさへ出ださず、歳月むなしく成長せしめ、これを嫁せしむるに、財を厭はざるもの多し、これを飜し、教へて嫁せしめんことをこそ、五雜俎に曰はく、「人能く百萬錢を捐て丶、女を嫁せしむるも、十萬錢を捐て丶、敢て子を教へず、寧一生の力を、利を求むるに用うるも、敢て半生の功を、書を讀むに殺めず、寧貨財を竭くして、以て權貴に媚ぶるも、敢て些微を捨て丶、

以て貧乏を濟はず、これ天下の通惑なり」と、世のまどひ、古今とも同じ、

儒佛の道芝居に落つ

今は演劇を、文明の演藝なり、俳優は文明の技藝なりとて、更にいやしめざれど、江戸幕府の時代には、役者といへど、甚だ卑しめて、常人と齒すること能はざりしなり、故に學者も、院本をつくる者などは、從つて識者のために擯斥せられたり、正木千幹と云へる人慨嘆して、小山田與清に語りしことあり、曰はく、「此頃了阿法師が、老松といへる淨瑠璃本の註釋を書きしに、小文字太夫（淨瑠璃語）が序を加へ、岸本由豆流が跋を添へて、刊本となし、今年（文政元年）十一月の顔見世狂言に、上官の見物人にわかち與へんと搆へたり」と、與清冷評して曰はく「抑も儒佛の道は、天下の大道なり、儒門の由豆流、釋門の了阿などが、小文字太夫と共に、書をあらはすは、實に文化のいたりいたれるが故と云ふべし、併儒佛の道は、地におちずして、芝居に落ちたりと云ひつべしや」と、以て其のいやしめられたるを知るべし、

幼兒を育つる心得

雨森芳洲

をさなき子を育つるみちは、這ひまはる時より、むしろの上におきて、心のまゝに這はせ、足すでに立ちたる時は、心しだいにはしりまはらせ、をさな子は、したぎ、はかまをきぬにせずといへるをしへに從ひ、着るものは、薄きかたにし、風に

も日にもわたりて、そとがちに遊び、くひ物は、すぐるこそはあしけれど、おほかたは、その心に從ひてこそ、やまひもなく、すこやかに生ひたつべきに、富貴の家に生れしをさな子は、かしづき、もりなどいへるもの、おびたゞしくつきそひ、風ひき給ふべきや、御腹そこねさせ給はんや、または御けがなどもやといひて、やはらかなるものを、幾重も着せ、くひ物ははかりにてかけなどして、這ひまはる時をはじめ、いだきすくめて、御うちがちにのみすれど、足のはたらきもおのづから遲く、うち痩せ、はかもろく、思ひよらざる病おこりて、そだち難きのみ多し、くすしはいふに及ぶべき、乳はゝ、もり、又はかしづきまで、かくはすまじき事と、思へるあれど、もしは、御いたみありてはと、その身の事のみ思ひて、いひもいださず、あるはおろかにして、上つ方の御子は、下ざまとはちがひたりと思ふもあり、人の血氣をもて生れいづる、貴き賤しき、何事かかはる事あらんや、ふるき言葉のこれをうつくしむは、まさにこれをそこなふゆゑんなりといへるを、思ひあはせて、悲しくぞおぼゆる、

ある、年たけて子をもちし人、めづらしさのあまりに、屛風ひきまはし、よる晝となく、いだかせおきけるに、をりしも夏の事にて、みな／＼あつさにたへかね、かはる／＼していだきけり、三十日あまりして、黄疸のごとく、病みて死にけり、おとなのたへがたきを見て、をさな子はさぞと思ふ心もなく、うつくしむのそこなふなることを知

らぬこそ、くちをしけれ、かゝる事、またあるべきにもあらねど、これに似たることは多しとぞ、

露の露

稲園子

關原軍記　文錄四年七月十五日、二代關白（豐臣秀次）、高野にて自害あり云々。同八月二日、三條河原にて斬られける秀次の北方を始め、侍女三十四人、辭世の歌の中に　おみやの方（一の臺女）十三歳

朝顔のつゆをば露とおもひしに
　いまわが身の上になりぬる

といふがあり。いかにあはれならずや。

安永八年版　婦女髪様（承前）

井上頼文寄贈



とうしがみ　に

けし　わけ



くりびむ　に　けしつと
うつぼさき　からがい



ふかしびん　に　みつつと
しのぶわげ

こぼれ梅

渡部乙羽

其三

後髪彈く三味線は祇園町、茶屋の仲居が取巻きに、大石良雄は本性を失ひて、腸を色酒に腐らし、海鼠のやうに泥醉れつゝ、幇間末社の手拍子に、乗つて胡蝶の夢心地、呂律まはらぬ舌頭に、池の汀の鶴龜はと、小謡唄ひ扇もて、調子とり〳〵後につく、女中はいづれ花の雲、霞たなびく振袖の、裏より匂ふ留木の薫に、良雄は一入興がりて。やア婢か〳〵、皆の者奥に行て遊んだがよい、もう踊も厭きて、三味線も嫌ひになつた、そう耳元でギャン〳〵やられては、この耳が聾になる哩、馬鹿奴、岩戸神樂ぢやあるまいし、大抵にして酒も切り上げよ、燒石に水の比喩はあれど、大石に酒を爾う呑まされては堪らぬ、拙者は此處にゴロリと轉んで、ドリャ一と寢入いたすと云やう、蝶になれ〳〵莊子の夢が、アヽヽヽ、女中共次へ立て只今これにて御寢あるぞと、他愛も無き肱枕は何事ぞ。身は一藩の大臣として、其君

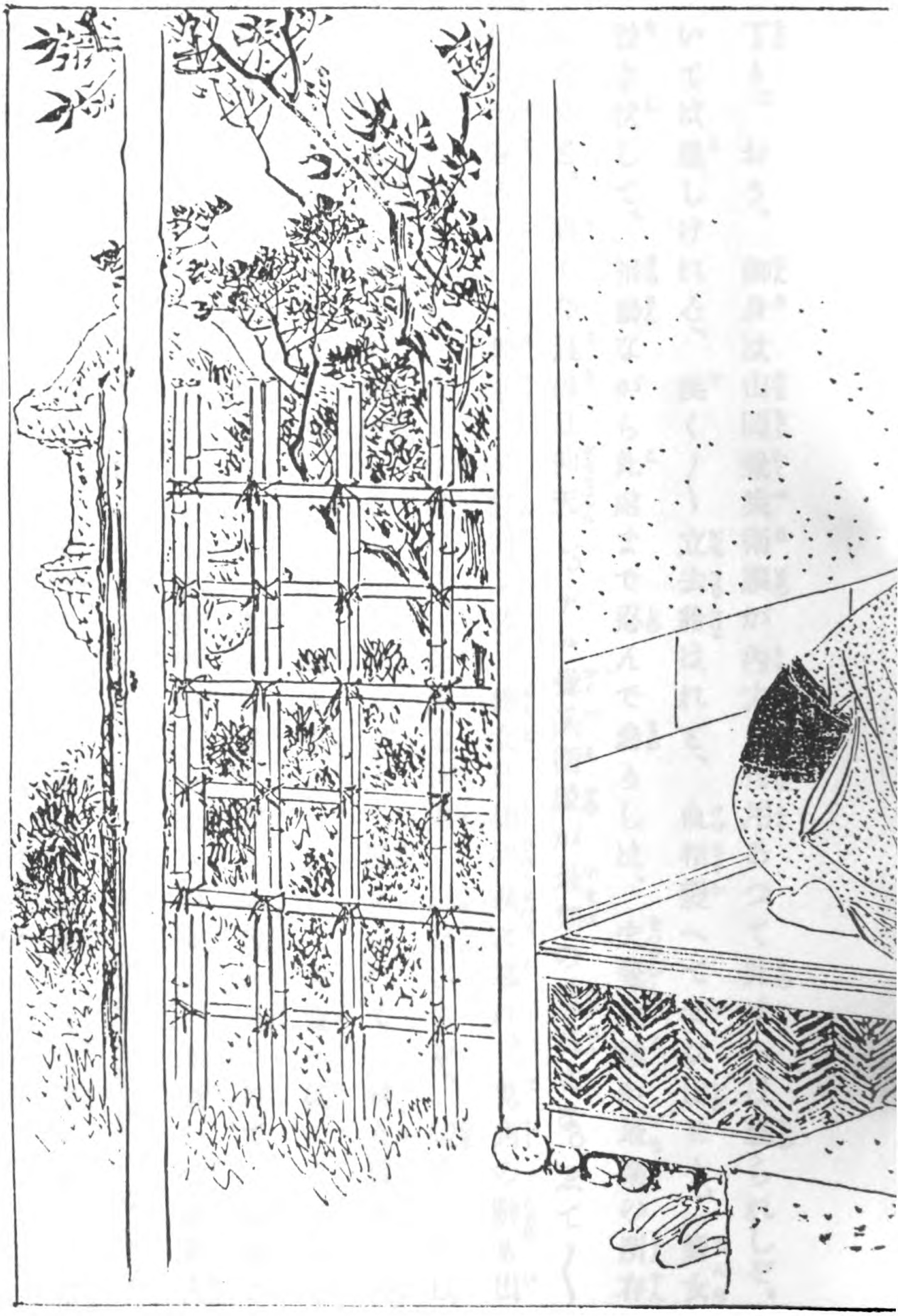
辱められし上は、城を枕に討死をもすべきに、生を偸み人目を忍びて、花に戯れ月に酔ひ、御馬前までと預りたる、命を酒と色とに奪はれ、家中の諸士と誓ひてし復讐の事杯は、今日になるまで鵜の毛程も口へ出さず、たま〳〵決意を問ふ者あれど、浮世は兎角色と酒ぢやと、大盃笠に高鼾。樽を枕の底ぬけ大壺、綽名を有喜様と呼ばれて、五條の橋より評判高し。

布團着て寝たる姿の圓山も、薄墨流す一刷毛の、闇に隠れて淡く濃く、鴨の水音聞ねど、こゝ一力の奥庭は、敷き詰めたる枯松葉に、零れし程の露の玉、遣水清く魚躍りて、釣燈籠の向ふには、芭蕉の風に破れしあり。その欄楯に大石は芋虫のやうに轉寝せしが、四邊に人無きを窺ひ、岸破と起きて庭前ヒッと打眺むるに、今宵し昇る廿日の月、竹の葉越にきら〳〵と、座敷の隅を照すに目をつけ、物をも云はず凋れかへり、落る涙を袖に拂ひて、アヽ變らぬは月の影、變るは人の身の上やと。思はず獨語折から、柴戸の蔭に婦女の聲して。御家老様と微に呼ぶ。呼ばれて大石驚きながら、早速に身を反して寐轉び。コリヤ女中共は居らぬか、水を持てと呼ぶ聲は、未だ本性は違はざりけり。

呼べども囈語と聞流して、寄り來る者もあらざれど、良雄はその儘高鼾、頓ては前後も知らず眠りぬ。夜は次第に更くれども、大石が四圍に人影だになく、宵の口には舞子お山と取巻きて、女護島の涅槃像の如く賑はひしも、眠れバ色香忽ち散りて、蜂も宿らず鳥も栖まず、此室のみ寂々寥々たり。

表の方のさんざめく、騷遊を避けて裏座敷に、良雄はまたも起き直り、栞戸の方見瞻りながら、訝かしげに頭傾け。はて合點ゆかぬ、最前たしかに我を呼びしは婦女の聲、舞子お山が呼聲あらむ、有喜樣とこそ云ふべきに、家老呼ばゝりは片腹痛し、聞說く仇上野方にては窃に忍びの者を入れて、味方の動靜を窺ひ居るとか、察する所最前の婦女の聲は、我心を試さんための、敵方の計略にてはあらざりしか、さるにても上野が心の穢なさよと、冷笑ひつゝ油斷なく四方に眼を配り見れど、垣根の下に人影あり、良雄は早くも目を注ぎ、其處に居るのは誰ぢやと問ふ。彼方も後邊に意を配り、恐る〳〵近寄りて。御家老樣、御免なされて下さりませと、云へども此方は心を緩めず、刀の鯉口うち濕して、曲者ならむ斫らんと詰め寄る。されど婦女は少しも臆せず、妾で御座いますと、燈籠の火前に顏さし向くるを、良雄はつく





づく眺め了り。おう、御身は山岡覺兵衛殿が內方、何用あつて此席へは參られしぞ、他目については惡しけれど、疾く／＼立去給はれと、血相變へて云ひ出せり。婦女は潛々と泣き伏して、推參ながら此處まで忍んで參りしは、夫覺兵衛が最期の所存を申上げんためと、聞くや良雄は仰天し。ナニ覺兵衛殿が最期の遺言とな。さて／＼樣子は如何で御座ると、膝押進めて打問ふに、婦女は始終涙に暮れ、兎角の辭も出でざりき。良雄は急き込み。えッ未練なり、此處を何處と思召さるぞ、暇とつては人目あり、事の大略搔摘んで物語らるべし、早く／＼と勵まされて、婦女は漸う涙をとゞめ。申すも悲しき事ながら、一通りお聞き下さいませ、夫覺兵衛こと本國を立退きし以來、嵯峨野の奥に侘しく暮らし居りし處、重き病氣に犯されて、足腰さへも自由ならず、無念の月日を送る中、北野で聞いた他人の噂に、赤穗の御家老大石殿は、祇園の揚屋に入浸りて、主君の仇を討たうともせず、酒に魂打拔かるゝは、腰拔武士の手本ぢやと、取沙汰するを眞實と思ひ、聞いたる儘を夫に話せば、口惜涙に搔き暮れ給ひて、變り易き人の心やと、嗟嘆の餘り妾の不在を幸ひに、ッイ自害して果てましたが、其後肌の守を見れど、神佛の符璽樣の物もなく、たゞ君父讐共

不戴天と書いたる遺書一通あり、これ御覧下され、懐劍までも持添へました、この上は夫の志遂げさせたけれど、名を連判帳へ記して給べ、婦女の淺い心から、御前樣を浮いたる方と思ひ込み、夫を先達てましたる罪を、お免しなされて下さいませと、地に額づきて泣き詫びける、良雄は嚴乎と容を正し、あゝ覺兵衛殿は不愍な最期を見給ひしよな、さりながら其志は屹度遂げさせやる程に、暫時山科に隱れ居るべし、サア人目無き間に立去れと、云ひて嘯く月の前、水も眠りて音絶えつ、葉竹戰ぎて白露の落ちて閃く光あるのみ。

文林

燕　　近衛　忠熙

なれ／＼てをすまく袖の下よりも
　通ふつばめのなつかしきかな

夕卯花　　東久世通禧

卯つ木さくかた山里のゆふぐれは
　いとゞ日ながき心地こそすれ

庭山吹　　黒田　清綱

七重八重さきころ匂へこゝのへの

くもゐの庭のやまぶきのはな

夕卯花　高崎正風

茜さすゆふひかげろひうのはなの
いろこそ白くなりまさりけれ

前田利嗣

すみそめのゆふべをぐらき山里の
垣根さやかにさけるうのはな

前田利鬯

墨染のゆふべになれどくれやらで
かきねさやけし庭のうのはな

暮春　中島宣門

いつしかと日數ながれてさくら川
昨日のはるもせゞのしらなみ

果もなく野邊は霞みてみえながら
はるの限りの日はいりにけり

夕卯花　小出粲

ともしひの光うつらふうのはなの
夕づゆさむしやまかげのいほ

琵琶の畫に　坂正臣

かきいだき袖におほひし面かげも
なかぞの月にうかびけるかな

夕卯花　植松有經

月影にまがふまがきのうのはなは
くれて後こそさやけかりけれ

谷勤

うの花の垣ねにそひてゆくみちを
過ぐれどやがてくれはてに鳧

内藤存守

夕暮のあそびあるきにおもはずも
うの花さけるさとにきにけり

今戸曉煙　松浦辰男

晨明のつきにさはれどおかしきは
いまぞわたりのけぶり也けり

野遊　林甕臣

雲雀なく空にこゝろはゆけど〳〵
あしなは野には歩むなりけり

春のゆふべ山さとをとふといふことを　大口鯛二

さしてこし家にもいらで先ぞみる
此のやまさとの花のゆふばえ

春祝　上地信光

をとめらが春のあそびのまり歌も

一二三よのよろづ代にして

庭上松　光岡正彰

としへても色はかはらぬ庭のまつ
幾千代かけてさかえゆくらん

鈴木宇右衛門の妻　佐々豊水

衣服をも櫛もかざしもなにかとて
つくしゝこゝろ慕はざらめや

備後三郎高徳　小澤幸民

かりみやの御前の花のさくらぎに
留めし言葉のにほはしきかな

夕卯花　鍋島榮子

足もとのくらくなりぬる夕ぐれに
なほさやかなる垣のうのはな

蜂須賀隨子

夕まぐれかけてほしたる白たへの
ころもとみしはうつ木なり鳧
前田 朗子

うの花の垣ねつゞきにさくみちは
暮れてもくれぬ心地こそすれ
栁原 愛子

眞白にもさきつゞきたるうの花に
ゆふやみしらぬ庭のおもかな

國府津のやどりにてをり／＼よめる
何 多仁子

うら／＼かに霞たなびく波のうへに
過ぎゆく船ぞこゝちよげなる

沖津かぜふくとみるまに波ちかく
よそめあやふきあまのつり舟

夕卯花
小池 道子

暮れ殘るうの花がきにむかひゐて
かゝげおくれぬ窓のともしび
松平 健子

寒からぬ雪とみるまでゆふぐれは
いよ／＼しろし庭のうのはな

春望
安東 菊子

大しまのけぶりもわかずなりに鳧
かすみはてたる伊豆のうな原

深山花 今様
故 岩下 山石人 上野

こゝろにかゝる白雲は
深山のおくの花なれや
行きみんとし遠けれど
あたら盛も過ぎぬべし

柳（今様）

故 岩本豊子（仝上）

春雨そゝぐ春柳の　花田の糸祉おかしけれ
日をふる間に色そひて　なびきそめけり朝風に

觀花菖蒲記

女子高等師範學校 尾見ふみ

ふりつゞきぬる五月雨のそら、いつはれぬべしともみえず。軒の玉水、木草のつゆ、見るものごとに、しめやかなり。日曜日としいへど、おなじ國より來つる、學びのともどち、うちつれだちて、証人の許なども、おとなふこと、例なるを、今日は朝より、たれこめたるまゝ、學びの窓も、いとしづかなれど、ひとり文机にむかひて、何くれと、ひきちらしたるに、ふみよむわざもうみて、外の方を見出だしたるほどに、故郷の事など、そゞろに思ひいでられて、母君は、いかにおはしますらん。さらでだに、なぐさめがたき、此のごろのつれ／＼を、ましてひとりおはする御身よ。年毎に、み心つくして、つくり給ふ庭の花菖蒲も、このごろこそ、さかりならめ。近きわたりならんにはなど、かへすぐ＼も、おもへるをりしも、室の戸あけて、入り來る人あり。たれにかと見れど、今朝出でにし友の、かへり來つるなりけり。いとはやうなど、いふほどに、うるはしき花菖蒲、あまたもてきて、今日家にゆきけるに、今をさかりに咲きたりけれど、一人のみ見てかへらんは、いとほいなき心地して、つゆけさもいとはず、ひきでしまゝに、もてきつるなり。み心なぐさめたまふ、れうにもなりなんには、花のめいぼくならましなどいひて、

いぬを見れど、白紫または、ゆはだのやうなるなど、いづれ劣らぬ色にて、まことに似るものもなう、うるはしきに、今しも思ひつる事なれど、故郷の便、ねつるやうなる心地して、うれしさいはん方なし。けふは居ながらに、花菖蒲をみて、いとよぎたのしみまてけりと、おもふまゝを、消息のおくに、かいつけて、ふるさとにおくりぬ。

船路の記（つゞき）　故人藪氏

水無月の末の三日、ともなひし人々の、京にのこれるも、難波の方に來りて、初めとひし宿にゐにけり。たよりの船もとむれ共、思ふやうにあらで、日をふるに、筑前の國黒崎の、住吉丸とかやいふ船をもとめ出でけり。舟人みたりは兄弟にて、今ひとりぞ、他の人なりける。たのもしき乘組なり。此舟よそはひて、故郷にいざかへらむとあなひすれど、文月朔日出でたつ。

折しもあれけさ立初むる秋風の
吹きくる方にかへる涼しさ

我ひとりは、先だちて、故郷より、難波に來り仕へて、代々すめる、ふるき友どちのかりに來り宿りて、ゆきゝはつか計りゐなじみて、むつまじくもてなさるゝに、立ち出でむとも、はた思ひはてず。されど、日さだまりて出でたてば、あるじ方の人々も、皆立出でゝ名殘をしみ、つきずいひかはして、扨わかれぬるには、つれなくわびしかりき。

忍べどもこれも別のことわりに

とまらで落つる涙ありけり

その夜は、舟を出ださでとまりゐぬ。何くれと思ひわびて、夢もむすばず。

うき寐する枕の下はよもすがら
ながるゝ水の音のみぞきく

二日、こぎ出でゝ、あぢ河にかゝる。中の島のほど、こぎ行くに、我やどりしかたの前を過ぐる、おもての格子簾おし上げて、手を出だしてまねく。取り〴〵詠め出でゝ、物をもいはましきけはひの見ゆれど、いとゞ戀ひしう見やらるゝに、舟はこゝろなく、いそぎ過ぎ行くぞうかりき。

別れ行く涙ひがたき袖のうへに
かゝるもわびしあきの夕波

あぢ河につきぬれど、舟人、舟つなぎて出で行く。今宵もこゝにかゝる。

三日、まだ夜ふかきに、舟をいだす。

芦よりもしげき難波のみなと舟
さはらで遠く漕出でにけり

この比、ひよりまちぬる舟々、いつよりも、多くかゝれりとぞ。河口出ではなるゝ比、漸く明けはてゝ、打ちひろぎたる海に出づる。朝もよひ、たちおほひて、なにはのかたは見えず。日さしのぼるにしたがひて、波も光りあひて、朝嵐に、舟ははしりていさぎよし。次第々々に浪あらく、風のこゝろもまさるからに、こゝち常ならねど、枕にゐよりて、えぞしまどろみぬるに、などみぬや、須磨はあとになりぬ、といふ聲におどろきいでゝ見れど、一二の谷ぞ、むかひにみゆる。今まひて

の濱見むと思ふに、たゞひとまた、きのうちに見えぬ。陸よりみしにはかはりて、さのみなけれど、ひきいりふしぬ。これはこれ、こゝちのつねならねど、こゝろのすゝまぬにやと思ふ。明石のせと打ち過ぎて、明石と高砂のあはひにて、風のなぎて、潮あひあしゝとてかゝれど、起き出でゝ、人人のかたらふにまぎれて、四方山のこと、聞こえかはしてゐるがうちに、いかりあげなどやなどいひて、舟人のいそげど、なまゝかゝりしやあがらず。西の風、おり〳〵吹きて、舟々すゝまず。みな帆をおろして見ゆ。つくしがたの人のみ乗りたれど、おもふかたより、風もふくにやなどいひたはぶれて、かゝれるいかりぞ、せいを出だし、力をつくしてひけども、千びきのいしにやかゝりけむ、ちからおよびぬけはひなり。船長も思ひうみて、筑後の國瀬の下といふ所に、あま御前の守とて、水難にいちじるき守あるを取り出でゝ、はまひきといふつなに、大きなる砥石をつけてまづめて、とかくするほどに、すら〳〵と、つゞかなく、あがりぬるこそ有り難けれ。ふねの中こぞりて、いただきよろこぶこと甚し。のむどに魚のはねのかゝりたるに、守の文字を、一字きりぬきて用ふれば、たちまちぬけぬ。又難産に、たゞ中の文字を用ふれど、たひらかなりとかや。帆だなにあがり、山山島々を見る。かしこぞ高砂なりときこゆれど、

はる〳〵とけふは其方に白波の
懸けてゆかしき高砂のまつ

むかひに、ちひさき島か、いしかとみゆるは、い

づこぞととへど、かめゐまといふとなん。

萬代は神ぞゐるらむにしの海の
青きが原にうかむかめゐま

風よく潮よくて、海のこゝろ靜かなり。ふねぞゆく。

靜かなる秋の夕かせ帆に見えて
なだてす舟の上ぞさびしき

なぞいひてながむるに、時うつれど、それかわらぬかとばかりに、ほのめくは、初あきの新月なり。いづらといへど、人のゆびさすにぞみし。

暮れかゝる雲と波との西の空に
秋の光りをみかづきのかげ

くれはてゝ、よもすがら、風にはしらす。帆をまきさげて、舟人はいねぶりもせず、ふねをやる。ひよりよけれど、とまもふかず、臥ながら、空をあふぎて、星を見るなり。すばる、天上、夜八合なぞいふをきく。實にこれぞ、昴といふ星なりとかや。ほしのめぐりは、月よりもはやしなといひあへり。

（つゞく）

雜報

●女教師の身裝　美しくきら〳〵しうせよといふにはあらず。美しくきら〳〵しきは、却りて、

生徒に驕奢を教ふるものなれバなり。たゞ、正しかれとこそいふにはありけれ。さりとて、今の世の女教師だちの身なりは、ことごとく正しからぬかといふに、さるよもあらざめれど、なべて、小學校などの女教師だちをうち見るに、大方は、いとはでやかなる縞の、身幅も、つとめて狹くしつらへる衣を着流しにしたれど、道行く時、さては、學校の内にて、いそがはしくたち歩く折などは、脛もいとあらはにうち見ゆるぞうたてき。粹とかいへる眼には、中々にえんなりとも見ゆべけれど、それは、藝娼妓などの上にこそあるべけれ。人の上に立ちて、人の子を教ふる教師の身としては、誠に、あかぬ心地のせらるゝなり。されど、物堅き吾人の望は、女教師の禮服を定めて、必、袴を穿くことゝし、登校の節は、常に、これを着くるやうにせられむ事を希ふにあり。無くて過ぎ來つるものを、今、新に調へむは、經濟の上、いかがあらむと云ふもあるべけれど、そは、是迄の如く、絹布の衣服を着くるをやめて、糸入なるを用ゐ、又、糸入をやめて、木綿とするやうに至りなば、おのづからに、償ひえられなむ。あはれ、女教師の着流し風、氣の利きたるやうにはあれど、正しとは見えず。粹なる姿のやうなれど、宜しとも思はれず。かくては、風教の上、いかゞはありなむ。さるにても、生徒の方には、かへりて、袴を着け、正しき身なりせるもの、いと多かるを。

●ゆかし　みめかたちは、とまれ。かくまれ。立ち居ふるまひしとやかに、言葉、いとやさしく和

みたる女の、客人の支度などに、群れ集ひて、聲高に笑ひ興じ、うち物語らひつゝ、いそがはしげにたち働ける賤の女の中にうちまじりて、同じ事したる。人より話しかけらるれど、よき程に返事し、おかしき事には、少しはゝゑみもすれど、さすがに、面はづかしき風情して、よろづひかへめにうちしなせる。他人の目にこそは立たね。萬綠賤の中の紅とかいへらむやうにて、いとゆかし。大方、上品なる女の下品しき業するは、素生、いかなるものなりけむと、いと〳〵ゆかしく見ゆるものなり。貧しき親戚も靈祭などに招かれて、厨を手傳へる良き家の娘、物堅き家より來りし婦など、すべて、古風の家庭教育を受けし女等には、かゝるものいと多かり。但し、貴き家の令人令孃等の、わざと、商業のまねし給ふは、此の限りにはあらずとか。

●にくし　これは、立ち居ふるまひも、言の葉も、あらゝかにいやしき女の、茶の湯插花の席、さては、さるべき會合の場などにたづさはりて、上品なる人と居並びたる。あたりの人は身をもかへりみ、所がらをも考へたれど、常よりも、いとしとやかに物しづかにしなせるを、巳れひとり、所得がほにうち物がたり、こゝかしこたちまはれる。これ無からましかば、いかばかり優なる會合ならましと思はるゝにつけても、にくさの程はまさるなりけり。大方品下れる女の、身の分をも顧みずて、生さかしらに、上品なる事するは、にくきが中にも、いと〳〵にくきものなり。主人風と

かいふものを吹かする下女、氏なくして玉の輿に乘りてし女、田舍の實家の富みをほこれる婦など、すべて、家庭敎育の足らはぬ下司どもには、からやうなるもの、いと多しかし。

●稀なる少女（故人）　今より四年以前、宮城縣牡鹿郡石卷町字新田の醫師遠藤隆庵の長女に、ひとしとて、その時やう／＼十三になれるがあり、天賚穎敏くして、いたく學のわざを好みけるが、是よりさき、同地の高等小學校に入りて、よくいそしみ勉め、夙に秀逸の聞たかゝりき。ひとし常常、小使にとて貰ひ得たる金錢あれど、浪に費さずして、必ず之を貯へおき、後には驛遞局に預けけるが、遂には積もり／＼て、金十圓ばかりになりにけり。然るに、ひとしが高等二年級に上りけるとき、重き疾病にかゝりて、あつく療養を加へしかども、更に醫藥のしるしなく、殆ど危くなりけるに、自らも其の生きがたきを知りけるにや、妾はとても回復の望なければ、兼て學資の補にもと貯へおける金も、今ははや身に要なきものとなりぬ、せめては學校に寄贈し、學の友垣の奬學金にもなし給はれと遺言し、いたましいかな、その年五月、ふりしきる卯の花くだしに誘はるゝ身となりて、遂にもろくぞ失せにける。こを眼前見聞きたるたらちねの心の中やいかならん。思ひやるだにあはれなり。されば父隆庵ぬしは、其の遺言にしたがひ、生徒奬學金として、石卷小學校に寄附しけれど、同縣知事、いたく之を感賞し、ことし、木盃一個を追賜せられたりとぞ。嗚呼高潔な

るかな。ひとしが行爲。

●棚橋絢子ぬしの演說（つゞき）　實地に應用なさいと申すばかりの事なら、何も今日此席で入釜敷しやべる程の事はありません、つまり餘計な口をたゝいて、御眠氣を買ふ樣な譯でありますから、默つて居る方が、却て自他の好都合でありますけれど、此「善く」と申す事の說明が致したいばかりで、不辯ながらも其苦みを堪へ、御耳ざはりの事を申すのであります、皆さん其御積りで御聞下さらんとを願ひます、

前にも申し上げました通り、御稽古爲さる方は、皆樣之を實地に應用しやうと云ふ御心持でなされるのでありますから、應用すると申すとは、今更私が申し上げずとも宜しき事と存じますが、唯々之を應用なさるに就き、善く之を爲さらうと御思になれど、物事には凡て保守主義を以て處せなければならぬ事と、改進主義を以て處せなければならぬ事とが有りますが、其邊に能く御注意なされて、從來御學びなされた事を應用なされど、其こそ實に善く之を應用なされたと申して宜しからうと存じます、尤も中には、保守、改進、取り交せて之に處して行かなければならぬ事も有りますが、其等の點にも能く御注意なさるのは、極めて善き應用の仕方であらうと思ひます、然らど其の保守主義に處置せねばならぬ事柄は、如何樣な者ぢやと申しまするに、細に考へましたら、まだ澤山に有らうと思

ひますけれども、先づ私は修身道德上の事柄、即ち我品行上に關する事、他人との交際上に關する事などでありませうと存じます、何故と申しまするに、凡て人間の道は、地の東西に論なく、時の古今に別なく、唯一でありますから、人倫道德を重んずるは、日本も西洋も變りたる事はありませぬけれども、人種も違ひ風俗も異なれど、自然と彼我の間に、其應用の仕方を異にして居りまして、我國では德義に協へる事と思て居ます事も、彼國では不德義の樣に心得て居る事もあり、彼國では德義に協て居る樣に認めて居ます事も、我國では不德義な樣に考へて居ます事もあります、然し是は風俗人情の違ひから來て居ます相違でありますから、必ずしも我を善しとし、彼を惡しゝとするとも出來ませず、又彼を可とし我を否とするとも出來ません次第でありまして、決して何方が間違やら分りませぬけれども、何に致せ、我國では、私が常々修身科の授業に於て御話し申しました通り、女子たる者は、父母舅姑に對して、貞順の道を守り、夫を天とし崇め、兒女召使等、凡て我目下の者は、力めて慈愛の心を以て之を導き、以て一家の和樂を謀り、人に交はるにも、心の及ぶ限り、我國從前よりの風俗習慣に從ひて之に接し、苟も禮を失ひ、道を缺く樣な行なからんとを務むるが、修身齊家の第一義となつて居ますから、そう致しませんけれど、女子の本分が立ちませず、又世間でも決して本當の行

と認めません、然るに私が世間を見渡した所では、斯道に於て、大に缺けたる所の行を爲さる方も、少なからぬ樣に思ひますが、其樣に昔からの女德を放擲して、西洋風でありますか、何だか存じませんが、新規の風を爲さる結果を見まするに、多くは一家の和樂を壞る樣でありまして、他人との交際上にも、餘り薫しき摸樣が無い樣であります、是も或は今の父母舅姑、並に世間の多數が、まだ天保時代の人でありまして、其新風を喜ばぬ爲で、其等の人が新風さへ喜ぶ樣になれば、隨分一家の和樂を買ひ、他人の歡心を得る樣にあるかも知れませんから、穴がち先の先まで惡いとは言へますまいが、兎に角今日の有樣では、矢張保守主義で遣ります方が、大に善き樣に思はれます、其故に私は、我が品行上に關する事、並に他人との交際上に關する事などは、先づ第一に保守主義を以て、之に處すべき事柄であると申したのでありまして、あなた方に是迄御稽古になつた修身齊家の道を、保守風に應用して御貰ひしたいと望む譯であります、

次に改進主義を以て處すべき事柄、並に改進主義に從來習ひ得たる所を應用すべき事柄は、何かと申しまするに、是も種々ありませうなれども、先づ差當り、家政經濟の事であらうと思ひます家政經濟と申せば、大きい意味を以て解しまするど、女子の政治學全体を含んで居りますけれども、通常世間に用ひまする狹い意味で申

しますれば、主として裁縫、料理、金錢、出納を指して居る樣であります、只今私が家政經濟と申しましたは、其の狹い意味の家政經濟を指した積でありますから、皆さん其御積で御聞下さい、さて此家政經濟と申しまするは、中々六ヶ敷者でありまして、一家貧富の分るゝ緒口であります、之を處置するの上手下手に由り、貧困なる人も富豪となり、富豪なる人も貧困となり、忽ちにして一家の摸樣に、非常の變動を及ぼす事でありますが、是は人倫道德上の事などゝ違ひまして、其目的とする處が、衣食の資を裕にし、飢ゑぬ樣凍えぬ樣に工夫をするを第一と云ますから、可成改進主義を以て之に處し、苟も好き工夫あれば、利用し得る丈、之を利用するが宜しいと思ひます、之に關する事柄に對し、舊來の習慣とか、世間の仕來とか申す樣な事に拘はりて、改良すべき場合に臨みても、其改良を怠る樣ではなりません、但し世間には、改良々々と申しながら、其實改良にはならず、却て不便不經濟なる事を引起す樣なのが多い事でありますから、改良は實に善い事でありますけれども、卒爾に之を行はず、注意に注意を加へ、最早失敗の憂なしと見留めの附いた後に、之を實行するも、亦信に改良を施す好手段であらうと存じます、私は此邊にも、どうか充分の御注意を願いたいであります、

次に半は保守主義を以て之に處し、半は改進主義を以て之に處せねばならぬと云ふ事柄、幷に

從來學び得たる所に就き、此合同主義を以て、之を應用せねばならぬ事柄は何かと申しまするに、私は兒童の教育、幷に之を施す方法てあらうと思ひます、兒童の教育が母親の力を必要とするとは、毎々私が申す通りでありまして、今更説明を致す程の事はありませぬが、兒童と申す者は、何時迄も兒童ではありません、必ず他日の國民と爲るべき者であります、左すれど此兒童の進歩發達は、正に他日國民の發達進歩であります、故に我國にして、今日の有樣を永遠に持續ける積ならば格別の事、苟も國家の進歩發達を望む者と致しますれば、兒童の教育は最も大切なる者であると申す事は、更に辨ずる者はあるまいと存じます、是が則ち國家が今日に於て、あなた方の樣な他日人の母たるべき方々を教養し、人の母となりて、其職分を盡し得ぬ樣な憂の無い樣に致す目的でありませう、若し其樣な譯でありますれど、兒童の教育、幷に其方法は、專ら改進主義を以て、其進路を定むべき者でありまして、此改進主義が行はれませんけれど、何時々々迄も、兒童の發達進歩は同じ事でありまして、國民の發達進歩も、亦之と共に停滯して進まざる樣な結果を見るであらうと言ふ樣な考が起りますが、又能く考へて見ますと、決してさうばかりでは無い樣であります、概して申せど、今日の教育法は、日進月歩と申すべき有樣で、日ゝ日に善くなるばかりの樣でありますけれども、私の目より見ますと、

昔の教育幷に其方法が、今日の教育幷に其方法より、大に優つて居る事も少なからぬ樣に思ひます、例へて申しますれば、今日の教育は、兎角自由々々と申して、兒童の身体思想は、可成之を束縛せぬ樣に致しまして、其發達を導きますから、善性美質の者は、大層よ能く發達して、立派な人になります代りに、性質の少しく偏したる者などは、非常に偏した人になつたり、或は全く世の棄物となつて仕舞ますが、昔の教育は、甚だしく兒童を束縛します故、非常に善き發達を爲すべき性質の者にても、動もすれば凡人に終る樣な事があります代りに、非常に偏したり、或は全く棄物になる樣な人は、澤山作り出しません樣な者で、何方にも得失相半ばして居ります、其故に 私は兒童の教育幷に其方法には、改進主義を以て、あなた方の學び得たる所を應用して御貰ひしたい 志 は山々でありますし、苟も兒童の教育上に施すべき純良の改良案がありますれば、飽迄も之を實施するを適當なる事ぢやと信じて居りますけれど、舊來よりの方法にて、純良なる者のある時には、可成之を保守し、新方案に於て、之に勝りたる便益あると充分に明かなる迄は、妄に之を改めざる樣の主義を以て、此重任に御當りなされんことを望むであります、是れ私が兒童の教育を以て、保守改進の兩主義を混用すべき事柄となし、又其方法を以て、あなた方の從來御學びなされた學問を、保守風、又改進風に應用なさるべき事

柄であると陳べました所以であります、右は私が卒業生諸君の前途に就き、平生窃に蓄へて居ました事の概畧であります、猶此他に申したい事もあり、又申した積で落しました事も澤山に在りませうが、何分今日は、充分なる用意を致すべき遑もなく、又充分に申したい事を申して居る時間も御座りませんから、不本意ながら是で止めに致します。（をはり）

六月兼題
- 五日
  - 歌……………楠母
  - 文……………人の學校卒業を祝ふ消息
- 廿日
  - 歌……………新樹
  - 文……………孝子の傳

元明天皇御製

益荒雄のともの音すなり物部の
　おほまへつきみ楯たつらしも

御名部皇女奉和御歌

吾が大君ものなおもほし皇神の
　つぎて給へるわれなけなくに

（萬葉集）

教の庭

五月二十日兼題　深夜郭公

天

谷の戸は宵にやいでしほとゝぎす　ふけてみやこの空になくなり　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

地

ほとゝぎす夜半の枕のひとこゑは　つらきねざめも嬉しかりけり　岩手縣氣仙郡盛町　山田先子

人

更くるよのゆめとうつゝの中空に　それかあらぬか山ほとゝぎす　大坂府丹北郡三宅村　橋本徽江

五月暗ふけ行くまゝにほとゝぎす　ねざめうれしくなのる一こゑ　高井繁子

短夜のふけ行くそらのつきかげに　なのりて過ぐるほとゝぎす哉　伊藤かえ子

山のはにかたむく月にさ夜ふけて　なくこゑ繁きほとゝぎすかな　里吉照子

月の入る方にすぎ行くほとゝぎす　こよひもいとゞふかくさの里　里吉孤子

五月やみふけ行くよはもひと聲は　さやかになのる山ほとゝぎす　千々波橋子

ぬば玉のよはのねざめを音づれて　なぐさめ顔に啼くほとゝぎす　澤田春子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

さよふけて結びしゆめを破りつゝ　ひと聲たかくなくほとゝぎす　藤井美子

まどろまできかずやあらまし郭公　いと夜ふかくもなき渡るかな　山中糸子

ほとゝぎす夢にもがなと忍び音を　待ちし寐ざめにきくぞ嬉しき　狩野秀子

夏の夜はまだ宵ながらふけ行くを　かこちてや鳴く山ほとゝぎす　藤澤元子

小夜ふけて枕べちかきほとゝぎす　かたぶく月をわれに見よとや　高橋政子

五月雨のふるのかみがき人絶えて　更行く夜半になくほとゝぎす　沖田みさを

ほとゝぎす更行く空のつきかげに　初ねのこしてかへるやまさと　永易いくの

ふかき夜に結びしゆめも覺めて鬼　山ほとゝぎすはつねもらして　永易たきの

まちわびし心やそらにかよひけん　更けてぞきなく山ほとゝぎす　福木稻子

待ちし夜の恨も晴れてほとゝぎす　思はぬよはのこゑのうれしさ　南大路素子

ほとゝぎす夜深き空のひとこゑは　我のみきくとおもひけるかな　南大路粂子

落ちかゝる月をや慕ふあまたゝび
よふかく名乘る山ほとゝぎす　南大路正子

ひと聲は夢かうつゝかほとゝぎす
耳うとき老のまくらにぞきく　南大路芳枝

さよふけてそことも別かず聲す也
月やたづぬるやまほとゝぎす　藥師昌子

まちわびて閨の戸とざす程もなく
ひとこゑ高く鳴くほとゝぎす　藥師滿喜子

郭公待たずばきかじなきはてゝ
ひとこゑのこるよはのつき影　佐藤敬子

更くる夜の暗きに迷ふほとゝぎす
つきやいづことなき明すらん　佐藤蝶子

たづねてもきかまほしきに郭公
ねざめ折よき夜半になくなり　勝家貞子

一こゑの名殘もあはれ小夜ふけて
もらす初音のやまほとゝぎす　押尾菊子

とても夜は更けにしものを郭公
今宵はともに鳴きやあかさん　高橋たか子

夜をふかみまちくたぶれて思寐の
ゆめおどろかすよはのひと聲　二葉まつ子

いとゞしく更けゆく夜半の枕邊に
一こゑなのるほとゝぎすかな　溝口奈保子

さ夜ふけてさやけき月のほとゝぎす
鳴音にいとゞあはれをぞ知る　中村備子

小夜深く寐ざめざりせばなか〳〵に
きくまじものを山ほとゝぎす　稻田晴江

ほとゝぎす人まづめてのならはしも
餘りにおそきいまのひとこゑ　稻田君子

小夜ふけて姿はやみに見えねども
こゑさだかなる山ほとゝぎす　植田貞子

さよふけて山のは遠きほとゝぎす
聲もはるかにきこえけるかな　小橋幸子

目覺めてもなほ郭公そら音には
あらじかとおもふ夜半の一聲　勝家貞子

ゆめ覺めてねられぬをりは郭公
只ひとこゑもうれしかりけり　早崎松子

ほとゝぎす聲聞かせてよ待侘びて
更け行く夜半はわびしかり鬼　土屋貞子

それぞともおぼつかなしや郭公
夜半のまくらにのこるひと聲　植木鋼子

さよふけてこゑの絶えせぬ時鳥
卯の花かげになきわたるらむ　河野文子

ふくる夜にはのめく月の峰よりや
誘はれ出でゝなくほとゝぎす　松田節枝

きかるゝを何惜みてかほとゝぎす
人のねむれるころになくらむ　松田いし子

ほとゝぎす夜深けし聲のその跡は
只たちばなのはなぞかをれる　松田やゑ子

海士衣なれやゑぬらんゑらなみの
よる〳〵更てなくほとゝぎす　松田孝子

草なびく音にもおどろくさ夜中に
ひと聲たかくほとゝぎすなく　橋本秀子

ほとゝぎす夜深く聞きし嬉しさは
夢かとばかりうたがはれけり　松井たまみ

待人のありと知らでやほとゝぎす
たゞ一こゑもよたゝなのらぬ　島田悦子

おもひわびねられぬまゝに郭公
　夜深く名乗るこゑもきかれつ　天岡　龍子

おぼつかな更け行く夜半の閨の戸に
　やすかになのる山ほとゝぎす　赤尾　玉子

五月やみ夜深き空にほとゝぎす
　おやめもわかずなきしきる也　安藤　鍵子

有明のつきはくもまにほの見えて
　むかひの岡にほとゝぎす鳴く　安藤儀妙尼

世の塵もしづまりはてしさよ中に
　しのび〳〵なくか山ほとゝぎす　伊東喜代子

五月五日兼題　五月雨

天　　赤尾　玉子

あはれいつまではれぬながめなるらんさらぬだにとひくる人もまれなる宿を

けふいくか日數へぬらんさみだれの軒の板戸もくちはつるまでいといたうつれ〴〵にながめくらせる夕つかた山のはにかかれる雲のやう〳〵うすくなりゆきて十日あまりの月はなやかにさしいでたる雲間のめづらしうもうれしきにさうの琴とうでゝちりうちはらひかきならしつゝをる折しものわらはのあないにつれていりくるは例のしたしくかたらふなにがしになんありけるいとさう〴〵しかりつるをようものしたまひつるないざ給へとてくさぐ〵のものがたりしがてらかたみにかきあはす程たち花の葉のこく青きに花の白きがいときはやかに見えてなつかしきかをりのするはよにしのばんほとゝぎすのねもまたるゝよのさまなりや

年毎にねぬよの數ぞつもりぬるなが一聲をきかんばかりにこよひは必と思へどいねずあかさんなどいひしろふ程俄にたちいづる村雲のまたかきくらしさとこぼすばかりふりくる雨につれて吹きくる風にまとはしてとうろのかげもいとくらきにまどをうつこゑなどうちずすることをりからなればいとあはれにをかしかりしか

地　　長野縣長野町　勝家　貞子

雨としいへばなべていとしめりがちなるをまして此頃の空のふすま張りたらむやうに雲にのみとぢはてゝ降りつゞきたる雨に物みな水にひちたらんやうに人の心もしめりていつ晴れぬべくも見えず朝には軒の雫に夢を覺まし夕には雨滴の音に寢覺めてつく〴〵と思ひかへせば降りそめしよりいく日になりぬらむ思ひゆけばいまいくかありて空は晴るらむとそゞろに猶も胸ふたかりて肝心もうせぬるをまして雨の音のおどろ〳〵しき夕などはつれ〴〵と降りくらしてしめやかなる

宵のと書きすさびけん古人の筆の跡とも思ひいでられていとゞしく身にしみまさりてなむ

人

千葉縣佐倉町宮小路町　植木鋼子

降初し程こそ日をも數へつれ此頃はならひとなりて今幾日あらむ晴なんとひたふるに待わびし心もやうやくをこたりぬ庭の池は昨日に今日と水かさまさりて汀の草は根を絶え流れ行に詠むるそらはいよゝ重なる雲のけはひすさまじけれどかくては我住古屋の軒もつひには朽やはてなん友許訪はんにも道ははや絶にきといふにつれ〴〵なる宵に閉ぢ果し窓のもとに獨物の本などくりひろげわづかにうさをやるもたへ難き心地になむ

福木いね子

かしましきまで蛙のなく池にかげをうつしてくちなしの色に咲ける山吹はた雪かと思ふばかり眞白に咲きたる庭の卯の花松の木の末にところせきさまして咲きかゝれる藤浪のあやなく紫の雲かとうたがはるゝなどとり〴〵をかしけれど心もそらに一日二日とすごす間にいつしか夏も半になりぬればをとつひも昨日も今日もをやみなく降る淋雨のいと物さびしきにかすかに田歌の聲のきこゆるは賤の女があめもいとはず早苗植るなるべしいでやろのさま見んとおもひてとに出んとすれど母上の

衣のぬるゝをやくなき事すなとのたまふに強がたくて書齋にこもりて文のひもとかんとすれどあやしきまでに頭重く殆ど我なから我身をもてあましぬ折から草ふかきしをり戶のあらく音にふとかなたを見やれど心しれる友の二人三人深き水こえてきぬるなりけり嬉しさのあまりいざたまへとおくにいざなひ心から打とけしめやかにかたりいづるに嬉しさはいかでせまき室にかくまひ得べき其餘りのもれてや今までこゑもなかりし郭公の軒ちかきかしは木のかげよりなのりて行くいとをかしともをかし折から友のかたへの硯箱取寄せふところ紙とり出てはしりかきに

こゑしめやかに郭公なく

とあれどとりあへず

おのづからこゝろさへよもうちとけて

はかなき腰をれをかいつけて返しぬるも折からの物うさわするゝ樂なりけり

南大路紫子

五月雨ははれやらで間なく時なくふりつゞく此比の空はいぶせき庭の草もはらひあへねばおのがまに〱生ひ茂り池の水も日増にましもてゆきて岸に植ゑし小松さへ水草と見あやまられつ軒の雫はたえずうちしぶきていぶせさもはたわびしさもいはん方なくなんかゝる折には露ふみわけてとふ人もなければおのづから世の中せばき心地してきのふもけふもひとりとぢこめられて古への文などとりいでゝうちながむれどそれも久しからず終にはものうく覺えておのづからねむり催す折しもなに

にかあらん物のおつる音のきこゆればいそぎ窓うちあけて見るに軒ちかき梅の實の色づきたるがここにみつかしこにいつゝおちたるになむ

中村備子

さつきの空さみだれの雨つれ〴〵と降りしきりいとゞ物思はしけれど文机により古の書き物を友として歌を詠じふみを作り特更に親しき友より送りこされし玉章などくり返しつゝ同じむしろにつらなり朝な夕なに言の葉交へし時の面かげを見る心地しつゝ過にし春の樂さを思ひ出てあるは歴史をひもとき古人の孝行などかたらひ或時はつれ〴〵に夜の目も合はず夢も結び得ず積りては河水もまし淺瀬も淵となる計りを止みなく柳の糸も水底に流し沼の浮草ねをたえゆくへも知らずなりなんと思ひつゝいたづらに日數をふる中五月の長雨も漸くはれきはとなり空すみ渡れる眺めに浮き立つ心地するも降り續く雨の爲にやあるらん

佐々有鄰子

門には梅の實あからみ庭には栗の花ちりはじめたるは五月雨の空になもありけるいぶせきものは軒むかたふきもりくる雫に床をひたし斷金の友も音信たえて前の小川にみなぎる水聲は鳴神のごと耳をつらぬき後の山よりさくなだりに落くるは瀧津瀬なして岩根木立草の葉末もひとつにあらひながせるさまなか〴〵にすさまじ昨日も今日もまたるるものはうき雲はらふしなどの神のいぶきにぞありけるあなかしこきねぎごとや

松田靜枝

あやしう降りつゞけばやがてくちなむふる屋の軒に巣をくむ蜂の聲もしめり庭の蓬も時ならぬ浪よ玉藻となりつ撫子もしをれてみごもり草と姿やつしゝきのふけふ我妹子が寐くたれ髪のさみだれや人の心もみだれがちなるに今宵は若葉をはらふ雨のをと淋しく夜半は一しほ物さびしくうたゝねの夢は片しく袖にとめくる橘のおひ風にさめ心なき身もいとゞむかしの忍ばれて堪へがたきに時鳥の一聲二聲雲間はるかに消えゆくは絶えて久しき都の友のおとづれつげんとにや數ふれば月を見ぬ夜も十日あまりの五月雨のいかに久しきことよ代はまさに樗の花の盛なるにあはれ五月の浮雲はやがて晴るべき日もありなんされど人の心の眞如の月にもし浮雲のかゝりなむいうか晴るべき時のあるべきおもへば身も世にあられぬ心地せられてなむ

島田悦子

五月雨の頃は只何となう心も進まず氣もふさぎ自づと徒然を覺ゆるものぞかし併し吾れ人心の持ち樣により喜怒哀樂の情も樣々に變るものと推せりそは五月雨の頃毎日雨に閑ぢらるゝ砌はともどち打寄り古今の孝子賢婦貞女などの談話たまには掃花などの遊びをしたらんには平時よりは心氣も落付てけれは却りて興あることへ思はる又山や野の景色も一際變る處などありて河水の瀉々として流るゝ樣山にかゝれる雲のたなびく樣など千差萬狀他の時に於ては得難きものよぞあるされど五月雨とていとはざれ却りて心情を養ひ閑雅優侚なる喜と樂とを得ることなればゆめ憂ふべからざることと

にころありけれ

安藤儀妙尼

五月雨の日數ふりゆくまゝげに山里はかゝりあはれにはかなき物はあらじかし都わたりは何くれと賑はゝしく朝な夕な文よみ歌合すなどおのづからつれ〴〵まぎるゝとの多かるさへうしと聞くまして人里はなれし庵住のもわびしさは更にもいはず日頃めなれしあまつなすすなはた麥の穗ふみさへしどろに打乱れ常にはむつびし雲雀さへいづちいにけん聲だにもなし唯このごろの五月雨のみはいつをかぎりともわかずふりつゞくめりいでやかゝる折こそは例の念珠つまぐりつゝ雲うちながむるよりはすべなかめれ

安藤鍵子

いたうも降りつゞく五月雨かなげに空もとゞろくばかりふりしきて野さへ山さへわかぬに立出でん心もうせて唯空のみながむるぞわびしきや程あき庭の草木もかたへのま垣もしどけなき迄よろばひ乱れて人せきがはなるもいとあはれふかきにましてかゝる時はと例の文の林歌の園などわけ入るに何の花さへ葉さへかざしえであやしう雨の音のみ耳にふれてなか〳〵に心さへしめり行なるははた云ふべきにもあらずさう〳〵しかくおどろ〳〵しうふりつゞく長雨に明日の空さへおぼつかなくつらづゑつく〴〵思ひくしたる折となりのをぢなるべしいつまでの雨ぞやなどわぶるを聞くも折からをかしうしばしはつれ〴〵まぎるゝわざになん

深夜郭公　延着

小夜ふけてかたぶく月を惜むらん
ふた聲みこゑほとゝぎすなく　碓井信子

さ夜ふけてさやけき月に忍びねの
一こゑもらすやまほとゝぎす　碓井たけ子

小夜ふけて獨かへればほとゝぎす
はつ音一こゑひろひけるかな　林ます子

待侘びてまどろみ初めし小夜中に
夢かうつゝかやまほとゝぎす　伊藤鈴子

更初めてわたりしづけきさ夜中に
ひと聲なのるやまほとゝぎす　青木春子

一こゑは高く名のりてほとゝぎす
更け行く月にをとづるゝかな　平松よし子

ふくるまゝさやかにすめる月影を
山ほとゝぎすなきわたるらん　石川すが子

五月雨　延着

碓井信子

五月雨のはれ間なくふる頃はとふ人もまれにていとつれ〴〵なれば心やりの遊びに筑紫琴の一手をも試みばやと思ふをりから柴の戸をたゝくものありて誰ぞと出でゝ見れば日頃親しき友の雨ををかして訪ひつるなりいとうれしくてかくて日數經れば山ほとゝぎすはいかに花立花はいかならんと打ち興じあるは折につけたる事など論ひあるは學びのわざなど語ひつゝ日の暮るゝも知らず日頃のつれづれをなぐさめしも五月雨の德といはまし

懸賞歌題

歌

一首　江崎きま子　　十四首　江崎みさ子
五首　落合操子　　一首　久保田臨子

一首　鹽井蝶子　　一首　吉野芳子
七首　安藤鈴子　　卅一首　佐々有鄰子
五首　篠原芳子　　三首　柳原文子
十四首　青木傑子　　四首　抽原政子
三首　松野雪子　　三首　清水學子
二首　中野爲子　　廿二首　師岡須賀子
廿五首　植木鋼子　　一首　宇田俊子
一首　村上春子　　二首　平塚松月子
三首　臼井千代子　　廿四首　高井孟子
六首　加納由良子　　十二首　木村美津子
九首　千々波橘子　　一首　吉田清子
二首　小池敏子　　一首　小川貞子
一首　鈴木擧子　　十七首　久保田律子
六首　西澤靜春子　　五首　大森準子
六首　西澤美登子　　一首　平塚千代子
二首　高田三喜子　　一首　山田由子
一首　阿部須磨子　　一首　今井照子
一首　江上加知子　　一首　荻原久良子
一首　小出登喜爲子　　十六首　廣田留子
一首　松本春子　　一首　門井豐子
一首　芳川竹子　　一首　楢崎松子
九首　木村彬香子　　一首　增山菊子

一首 立野角子
一首 大川政子
一首 箕浦花子
一首 久保田光子
一首 遠江無名子
一首 赤座銀子
一首 澤田春子
二首 増山國子
廿三首 稲田君子
廿三首 福木稲子
十五首 橋本數枝子
七首 彌石琴子
一首 春木園子
一首 加納武子
十三首 中村友子
十二首 稲田園子
十二首 川井田さよ子
一首 神尾松子
五首 松野賀津代
二首 西山文子
一首 三里雪子
一首 茂田鴻子

一首 福田彌生子
一首 岡部綾野子
一首 清水丸子
三首 大手さよ子
一首 曾我部かね子
廿二首 師岡千代子
二首 江崎政子
廿六首 松田靜枝
六首 西川德子
一首 下田花子
一首 新田秀子
一首 林鹿子
十五首 松田八重
十八首 稲田春江
十首 松田節枝
二十首 勝家貞子
一首 松田操子
一首 水野清子
二首 金井眞子
一首 菅野花子
九首 高橋政子
一首 桂慶子

四首 山代由子
三首 相眞元子
七首 渡邊榮子
二首 大鐘きよれ
一首 山下竹子
二首 阪幸子
三首 渡邊美重子
六首 中村備子
五首 高橋千代子
一首 後藤愛子
一首 歐常子
一首 小泉千世子
一首 手島千代子
四首 坂本數子
一首 平尾重野
一首 伊藤國子
二首 鈴木勝子
一首 宮坂八慶
一首 木村馨子
十三首 松井たまみ
七首 楢崎光子
一首 和田ちか子

三首 黒川椿子
一首 石橋かよ子
六首 山田先子
一首 木下安子
一首 佐田久子
一首 久保田孝子
二首 大橋きろ子
一首 内田菊江
六首 瀬戸佐登子
十二首 南大路素子
三首 横山君子
九首 狩野芳子
一首 深見種子
三首 坂本金子
一首 平尾龍野
一首 平尾竹野
二首 大崎末子
四首 大槻季夫
十一首 青木春子
十三首 田村千代子
三首 沖田みさを
六首 水上千代子

五首 山口明子
一首 松井鶴子
四首 岩下光子
一首 大槻修子
一首 高井千代子
一首 桑原喜佐子
一首 稲田緑子
一首 金澤由子
一首 中井竹子
一首 國司みね子
四首 里吉盈子
一首 吉木貞子
一首 吉木峯子
一首 和田千賀子
一首 岡村今子
一首 三須政子
一首 村越久子
一首 黒澤千代子
一首 菅沼小船子
八首 高井葉子
五首 山手花子
一首 黒澤千代子

一首 木村房子
三首 佐藤秋子
三首 宮川清子
六首 島田悦子
一首 渡邊安子
一首 山崎庫子
一首 稲田稔子
一首 渡波廉子
一首 片岡久子
一首 松井常子
四首 里吉照子
一首 長野米子
一首 加藤末子
四首 兒島秀子
六首 飯室宮子
六首 飯室照子
十首 堀内安子
一首 桑門電子
一首 飯島伊勢子
一首 峯岸郁子
七首 上原富子
一首 續木香芽子

八首 河野みね子
三首 藤井艶子
三首 宇多田楊子
一首 備中鶴子
一首 吉弘周子
三首 石井常子
四首 山崎くみよ
四首 河野春子
七首 南大路芳子
七首 南大路正子
一首 松井牛子
六首 飯田梅子
一首 岡本庫子
二首 渡邊龍子
三首 松田つぎ子
三首 松田石子
一首 中尾今子
五首 森田照子
三首 井出悦子
四首 平山ゆふ子
一首 久保松子
三首 伊藤知恵子

一首 里吉菊子
二首 黒澤政子
一首 上川菊子
五首 武智卓龍子
七首 道家八重子
一首 河北つたよ
四首 矢野みきゑ
一首 五味信子
六首 山中糸子
一首 松井伊豆子
六首 湯川きは子
四首 雲井なほゐ
二首 渡邊庫子
五首 森田時子
三首 松田峯子
二首 松田幸子
一首 兒島秋子
二首 澤井登勢子
五首 伊藤加位子
一首 長谷紫子
三首 森田徳子
二首 小畑種子

一首　橋本りやう
三首　佐藤敬子
三首　勝家眞子
二首　田中淺子
二首　高橋安子
一首　高野春子
一首　武內すい子
一首　佐藤家子
一首　諫山廣子
一首　三浦たの子
一首　山崎榮子
一首　宮田彌壽子
一首　早崎岩子
三首　竹下君子
一首　青木辰子
一首　大竹治子
二首　桐　文子
二首　山田瑋子
二首　花山やすゑ
三首　押尾菊子
一首　井戸禎子
三首　足利世根子

一首　橋本嘉子
六首　瀧川慶子
一首　田中駒子
一首　瀧川君子
一首　高橋たま子
一首　山口豐子
一首　龜井梅子
一首　奈眞眞子
二首　萩尾すみ子
一首　井戸綾子
六首　河野文子
二首　小澤眞佐子
一首　竹下岩子
三首　竹下すい子
四首　雲井花子
一首　臨岡常子
一首　八羽光子
一首　安元やすゑ
二首　花山みさを
二首　二葉松子
二首　松田元子
一首　尾崎七雄子

一首　澤　滿壽子
一首　藤澤元子
二首　大亦隆子
二首　內田雪子
二首　上松直子
一首　伊東清子
一首　谷　けい子
一首　濱口直子
一首　高野みね子
二首　平島りやう
二首　佐藤みゆき
一首　矢島婦留子
一首　犬塚丸子
一首　南大路象子
一首　黑田政子
一首　平松賀壽子
一首　寺尾たま子
一首　門田留子
一首　廣岡登子

文

廿四首　佐々有鄰子
十首　江崎みさ子

一首　黑田さま子
一首　大田綠子
二首　內田慶子
二首　上松菘子
一首　松葉俊子
一首　富田仁壽子
一首　淡海香女子
二首　高瀨高子
一首　小山みね子
二首　妹尾ゆう子
一首　藤原菊尾
一首　菅野章子
一首　小林米子
一首　黑澤花子
一首　伊藤安子
一首　阿南健子
一首　赤尾愛子
一首　尾村さく子
一首　小園常子
十四首　師岡須賀子
一首　檜崎松子

二首　大手さよ子
十七首　植木鋼子
八首　中村友子
十首　福木稻子
一首　水野清子
二首　川井田さよ子
一首　前田雄子
二首　深見種子
一首　鈴木勝子
二首　湯淺うの子
四首　青木春子
一首　手島千代子
一首　楢崎光子
一首　松井說子
四首　稻田君子
三首　冲田みさを
一首　金澤芳子
一首　横山君子
二首　武智卓能子
一首　五味信子
二首　岡本庫子
一首　兒島秋子

一首　山名益子
十九首　松田靜枝
七首　青木傑子
十七首　勝家眞子
一首　臼井千代子
六首　中村備子
二首　廣田留子
三首　坂本數子
十二首　田村千代子
一首　木村馨子
一首　海賀八重子
二首　高井千代子
一首　長沼かなる
一首　交野雛子
五首　岩下光子
三首　宮川清子
三首　師岡千代子
一首　備仲鶴子
一首　松井たまみ
一首　堀内安子
一首　中島今子
一首　石橋清子

五首　上野富子
一首　山崎榮子
一首　福岡常子
三首　山手花子
一首　赤尾玉子
一首　大亦隆子
一首　平島りやう
一首　矢島婦爾子

一首　中井竹子
一首　高橋安子
一首　田中淺子
二首　足利世根子
一首　宇多田楊子
一首　淡海香女子
一首　佐藤みゆき

○挿畫

木華咲耶姫命之御圖（史談）　松本楓湖（二）
貧女孝養の圖（史談）　小峯蘭甫（一）
弟橘姫命之御圖（口繪）　富岡永洗（二）
橘逸勢の女の圖（口繪）　富岡永洗（三）
貞婦物思の圖（小說）　武內桂舟（三）
上毛野形名の妻の圖（口繪）　松本楓湖（四）
貞婦老姑に侘ぶる圖（小說）　富岡永洗（四）
引田部赤猪子の圖（口繪）　富岡永洗（五）

かしこきや皇御國はうましくに
うらやすの國くにのまほくに
物皆はかはりゆけどもあきつ神
わがおほ君の御代はとこしへ

（玉鉾百首）

明治廿六年下半期月並兼題

月	日	歌	文
七月	五日	歌……荻風	文……荻の詞
	廿日	歌……月前筏	文……螢を見舞ふ消息
八月	五日	歌……旅宿鹿	文……學問は何の爲にするか
	廿日	歌……女郎花	文……月夜友をまねく
九月	五日	歌……松下禪尼	文……見紅葉
	廿日	歌……菊帶露	文……暮秋山家
十月	五日	歌……閑庭落葉	文……時雨ふる日人の許にやる文
	廿日	歌……名所千鳥	文……和歌の論
十一月	五日	歌……夜水鳥	文……冬野
	廿日	歌……春日局	文……雪の朝友を訪ふ
十二月	廿日	歌……雪中早梅	文……披書思昔
	五日	歌……老少惜年	文……松不改色

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても隨意に投稿することを得但し一週日前に本社に届くやうせらるべし

投稿者は宛名を幽光社編輯部とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形たる文字は鮮明に書かるべし特に投稿者の宿所姓名を詳に記さるべし

投稿歌文中より天地人の三首を擇り天に三部地に二部人に一部女鑑をす並にすべての歌文は原稿投着順に女鑑敎の庭に揭載す

發行兼印刷人　川崎直衛　編輯人　山根亙

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立に正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一册代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第貳號目錄

發行所
麴町區平川町五丁目
國光社

女鑑第三十八號目次

（明治二十四年八月八日內務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿六年五月十九日印刷
同年同月二十日發行

發行兼印刷人 東京麴町區平川町六丁目十二番地 川崎直衛
編輯人 同 東京麴町區平川町五丁目十六番地 山根勇藏
發行所 國光社

（赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行）